III　資料報告

例　　言

○　本編は九州内における発掘調査出土資料および採集資料の報告である。
○　柳貝塚採集資料の大半は、福田正文氏に提供していただいたものである。
○　大池遺跡出土資料は、牛島盛光氏により熊本大学文学部考古学研究室に寄贈していただいたものである。
○　大池遺跡出土土器の胎土中鉱物の鑑定は、元熊本大学理学部松本幡郎先生にお願いした。
○　1・11・14・16ページの地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図および2万5千分の1地形図を掲載したものである。
○　本編の編集は村上浩明がおこない、執筆分担については執筆者名を各文末に記した。
○　各遺物の実測、製図作業はそれぞれの執筆担当者がおこなった。
○　本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
○　整理作業者は以下の通りである。
甲元眞之　木下尚子　小畑弘己　杉井健（以上教官）
藤木聡（宮崎県埋蔵文化財センター）
冨永明子（熊本大学埋蔵文化財調査室）
新里亮人　中川毅人　村上浩明（以上大学院1年生）
矢羽田幸宏（学部3年生）
芝康次郎（学部2年生）

本文目次

一　柳貝塚採集資料……1
　1．資料報告に至る経緯……1
　2．柳貝塚の位置と環境……1
　3．採集遺物……2
　　（1）土器および土製品……2
　　（2）石器……4
　　（3）貝製品、骨角器および動物遺存体……9
二　轟貝塚出土の動物遺存体および貝製品……11
　1．資料報告に至る経緯……11
　2．動物遺存体……11
　3．貝製品……12
三　大池遺跡出土資料……14
　1．資料報告に至る経緯……14
　2．土器……15
四　下益城郡松橋町六地蔵採集資料……16
　1．資料報告に至る経緯……16
　2．須恵器……17
　3．石製品……18
　4．遺跡の性格……18

挿図目次

第1図　柳貝塚位置図……1
第2図　柳貝塚採集土器実測図……3
第3図　柳貝塚採集土製品実測図……3
第4図　柳貝塚採集石器実測図1……5
第5図　柳貝塚採集石器実測図2……7
第6図　柳貝塚採集石器実測図3……8
第7図　柳貝塚採集骨角器・貝製品実測図……10
第8図　轟貝塚位置図……11
第9図　轟貝塚出土貝製品実測図……13
第10図　大池遺跡位置図……14
第11図　大池遺跡出土土器実測図……15
第12図　遺物採集地点および関連遺跡位置図……16
第13図　採集須恵器実測図……17
第14図　採集石製品実測図……18

表目次

第１表　柳貝塚採集土器および土製品観察表……4
第２表　柳貝塚採集石器計測表……9
第３表　蟲貝塚の動物遺存体部位別骨片数……12
第４表　大池遺跡出土土器観察表……15
第５表　採集須恵器観察表……17

図版目次

図版１上　柳貝塚遠景
　　中　柳貝塚近景
　　下　柳貝塚採集土器（１）
図版２　柳貝塚採集土器（２）および土製品
図版３　柳貝塚採集石器（１）
図版４上　柳貝塚採集石器（２）
　　中　柳貝塚採集骨角器、貝製品
　　下　柳貝塚採集動物遺存体
図版５上　蟲貝塚出土動物遺存体
　　下　蟲貝塚出土貝製品
図版６　大池遺跡出土土器
図版７　遺物採集地（松橋町六地蔵）近景、採集遺物

一　柳貝塚採集資料

1．資料報告に至る経緯

資料報告に至る経緯

熊本大学文学部考古学研究室に所属する有志学生は、以前より天草地域の縄文時代遺跡に興味をもち、資料の採集活動をおこなってきた。そのような中、2000年春、福田正文氏によって柳貝塚の遺物が当研究室に提供された。氏は熊本県内各地で精力的に遺物を採集されている。天草地域も例外ではなく、その活動は10年以上にも及ぶ。長年の努力の成果である資料は、種類、量ともに充実しており、それらは天草地域、ひいては九州の縄文時代研究にとって非常に重要な資料であるといえる。そこで今回は、氏の採集資料に我々の採集資料も一部併せて報告することとしたい。

（村上）

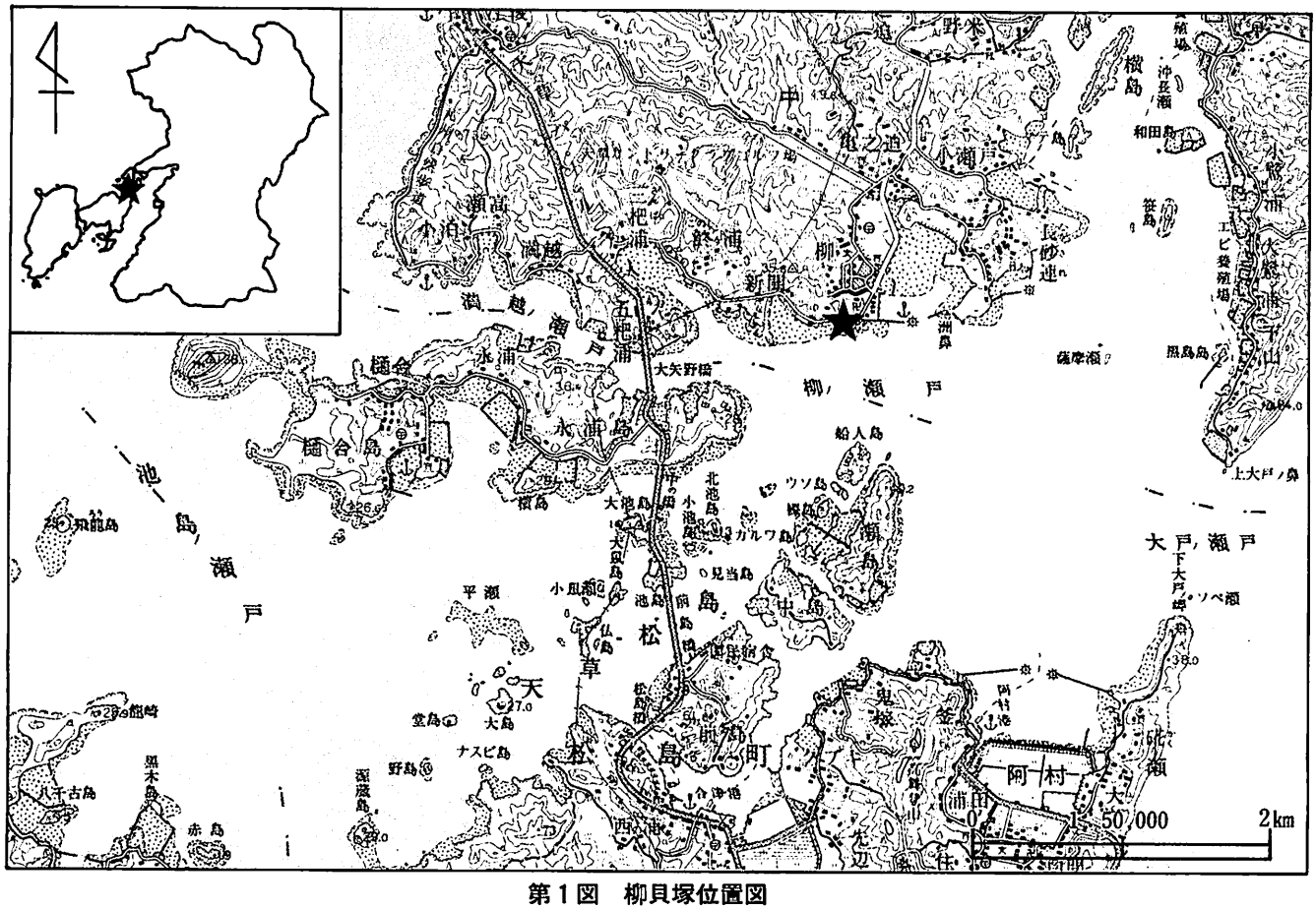
2．柳貝塚の位置と環境（第１図、図版１上・中）

柳貝塚の位置と環境

本遺跡は、熊本県天草郡大矢野町中柳に所在する。天草上島の北方にある大矢野島の南海岸に位置する遺跡である。前面の海は柳ノ瀬戸と呼ばれ、そこから東の大戸ノ瀬戸をぬけると八代海が、西の満越ノ瀬戸をぬけると島原湾が広がっている。当地周辺は、格好の漁場を周囲に備えた漁撈の基地となりうる場所である。現在も遺跡のすぐ東には柳港という漁港があり、それを裏付けている。

そのような場所に本遺跡は所在するが、満潮時には海面下に没してしまうため、遺物が採集できるのは干潮時のみである。

（村上）



第１図　柳貝塚位置図

3．採集遺物

（1）土器および土製品（第2・3図、図版1下・2）

本遺跡から採集されている土器片は多数あるが、ほとんどが縄文時代早期末から前期にかけての深鉢形土器の口縁部片、胴部片、底部片である。また、土製品が4点含まれていた。

蟲式系　**口縁部**（第2図2～4・6・9）　いずれも蟲式系土器の口縁部片である。2は内外器面とも横位に貝殻条痕調整されたのちやや強くナデられている。口唇部はナデられて平坦になっている。外器面の口縁上端部にヘラ状工具による刻目が施され、それ以下には横位の微隆起線が貼り付けられる。3はやや波状気味となる口縁部片で、内外器面とも横位に貝殻条痕調整されたのち軽くナデられている。口唇部には棒状工具による刺突文が施され、外器面には横位の隆起線が貼り付けられている。4は内外器面とも強くナデられており、貝殻条痕の痕跡はみられない。口唇部には棒状工具による刺突文が施される。6は内外器面とも横位に貝殻条痕調整されたのち軽くナデられている。口唇部はナデられ平坦になり、外器面には棒状工具による横位の沈線が引かれ、その上部が隆起線状になっている。9は内外器面とも横位に貝殻条痕調整されたのち軽くナデられている。口唇部には棒状工具による刺突文が施され、同じ工具で内器面の口縁上端部に横位沈線が引かれている。外器面には横位の隆起線が貼り付けられている。

蟲式系　**胴部**（1・5・7・8・10～15）　1・8・10～12・14は蟲式系土器の胴部片である。いずれも内外器面は横位に貝殻条痕調整されたのち軽くナデられている。1の外器面には調整に用いたものと同じ貝により曲線文が描かれる。8・11は縦位の隆起線が貼り付けられる。10は横位の隆起線が貼り付けられ、その間に波状の隆起線が貼り付けられる。12は棒状工具により接近した沈線が2本引かれ、その間が隆起線状になっている。14には文様がみられない。

野口式　7・13・15は蟲式と曽畑式の間に位置するといわれ、野口遺跡[1]などから多く出土している野口式土器[2]の胴部片である。7の内器面は貝殻条痕の痕跡をわずかにとどめているが、ほかはその痕跡をとどめていない。7・15は外器面に棒状工具で平行沈線文が施され、13は平行沈線文間に曲線文が施される。

平栫式　5は平栫式と思われる胴部片である。内器面は横位に貝殻条痕調整されているが、外器面にその痕跡はない。外器面には棒状工具で縦位沈線が引かれ、その間に連点文が充塡される。

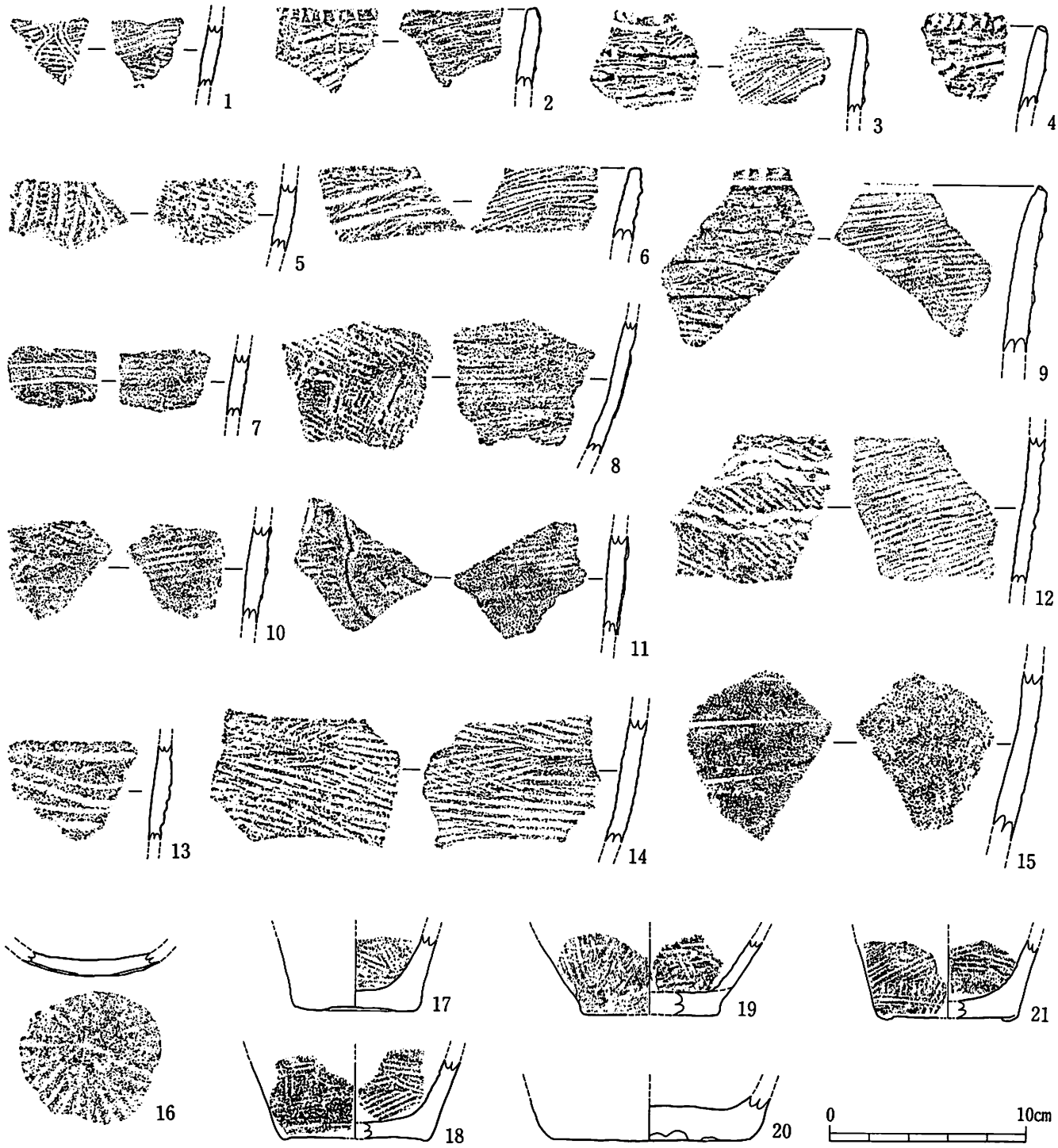
曽畑式　**底部**（16～21）　16は丸底で、内外器面とも丁寧にナデられている。外器面には棒状工具により放射線状の沈線文が施される。採集品中唯一の曽畑式土器である。

蟲式系　17～19・21は蟲式系土器の底部で、すべて平底である。いずれも内外器面ともに縦横に貝殻条痕調整されたのち軽くナデられているが、17の外器面のみ貝殻条痕の痕跡がみられない。

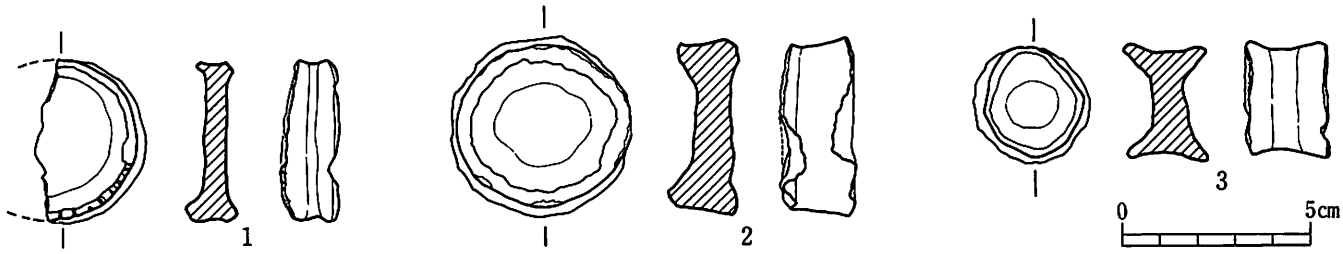
20はどの土器型式にともなう底部かわからないが、おそらく早期末頃のものか。平底で、内外器面ともナデられ、貝殻条痕の痕跡はみられない。外器面には深い指頭圧痕がみられる。

耳栓　**土製品**（第3図1～3）　いずれも臼形を呈する耳栓である。全面ナデ調整によって仕上げられ、1以外は無文である。1は表面の縁にヘラ状工具による刻目が施されている。図示していないもう1点も他と同様の形状を呈する耳栓で、無文である。　（村上）

註（1）富永直樹編『久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米市文化財調査報告書第28集　久留米市教育委員会　1981
（2）このような土器は以下の論文中で様々な名称が与えられているが、ここではその出土量が多い遺跡名をその呼称として使用した。
田島龍太「菜畑遺跡」『末盧国』六興出版　1981
中村愿「曽畑式土器」『縄文文化の研究』3　雄山閣　1982
水ノ江和同「曽畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』117　古代学研究会　1988



第２図　柳貝塚採集土器実測図



第３図　柳貝塚採集土製品実測図

第１表　柳貝塚採集土器および土製品観察表

番号	部位	胎土	色調※1	調整※2	文様	備考
第２図１	胴部	砂粒	褐（7.5YR4/4）/黒褐（7.5YR3/1）	横貝軽ナ/横貝やや強ナ	貝による曲線文	
2	口縁部	砂粒、黒色鉱物	黒褐（7.5YR3/1）/にぶい黄褐（10YR5/3）	横貝やや強ナ/横貝やや強ナ	刻目、隆起線文	
3	口縁部	砂粒	にぶい黄褐（10YR5/3）/黒褐（10YR2/3）	横貝軽ナ/横貝軽ナ	刻目、隆起線文	内外煤付着
4	口縁部	砂粒	黒褐（7.5YR3/1）/にぶい褐（7.5YR5/4）	強ナ/強ナ	刻目、隆起線文	
5	胴部	黒色鉱物	褐灰（10YR4/1）/褐灰（10YR4/1）	横貝/ナ	沈線文、刺突文	
6	口縁部	砂粒、黒色鉱物	明赤褐（5YR5/6）/赤褐（5YR4/6）	横貝軽ナ/横貝軽ナ	隆起線状文	
7	胴部	砂粒、黒色鉱物	明赤褐（2.5YR5/6）/赤褐（5YR4/1）	ナ/横貝強ナ	沈線文	
8	胴部	砂粒	黒（7.5YR2/1）/黒褐（7.5YR3/1）	横貝ナ/横貝ナ	隆起線文	
9	口縁部	砂粒	褐（7.5YR4/4）/にぶい黄橙（10YR6/3）	横貝ナ/横貝ナ	隆起線文	外煤付着
10	胴部	砂粒	にぶい黄褐（10YR5/4）/にぶい黄（2.5Y6/3）	ナ/横貝ナ	隆起線文	
11	胴部	砂粒	褐（10YR4/6）/黒褐（10YR3/2）	横貝ナ/横貝ナ	隆起線文	
12	胴部	砂粒	にぶい褐（7.5YR5/4）/黒褐（10YR3/2）	横貝/横貝軽ナ	隆起線状文	外煤付着
13	胴部	砂粒	黒褐（10YR3/1）/黒褐（10YR3/1）	ナ/ナ	沈線文	
14	胴部	砂粒、黒色鉱物	にぶい黄橙（10YR6/4）/にぶい黄橙（10YR6/4）	横貝軽ナ/横貝ナ		
15	胴部	砂粒	にぶい黄橙（10YR7/4）/にぶい黄橙（10YR7/2）	ナ/ナ	沈線文	
16	底部	黒色鉱物	黒褐（7.5YR3/1）/黒褐（10YR2/3）	ナ/ナ	沈線文	曽畑式
17	底部	砂粒	赤褐（5YR4/6）/にぶい橙（7.5YR6/4）	ナ/横貝ナ		
18	底部	砂粒	にぶい橙（7.5YR6/4）/にぶい橙（7.5YR6/4）	横貝強ナ/横貝軽ナ		外煤付着
19	底部	砂粒	明褐（7.5YR5/6）/にぶい褐（7.5YR5/4）	横貝ナ/横貝ナ		
20	底部	砂粒	明赤褐（5YR5/8）/黒褐（10YR3/1）	ナ/指押ナ		内煤付着
21	底部	砂粒	褐（7.5YR4/4）/灰黄（2.5Y6/2）	横貝ナ/横貝ナ		外煤付着
第３図１	土製品	黒色鉱物	にぶい橙（7.5YR７/4）	ナ	刻目	煤付着
2	土製品	砂粒	にぶい褐（7.5YR5/4）	指押ナ		
3	土製品	黒色鉱物	にぶい橙（7.5YR6/4）	ナ		

※１外面/内面。色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』　日本色研事業株式会社1986による。なお、「Hue」は省略している。
※２外面/内面。横貝（横位貝殻条痕調整）、軽ナ（軽いナデ調整）、強ナ（強いナデ調整）、指押（指押さえ）。調整順に表示している。

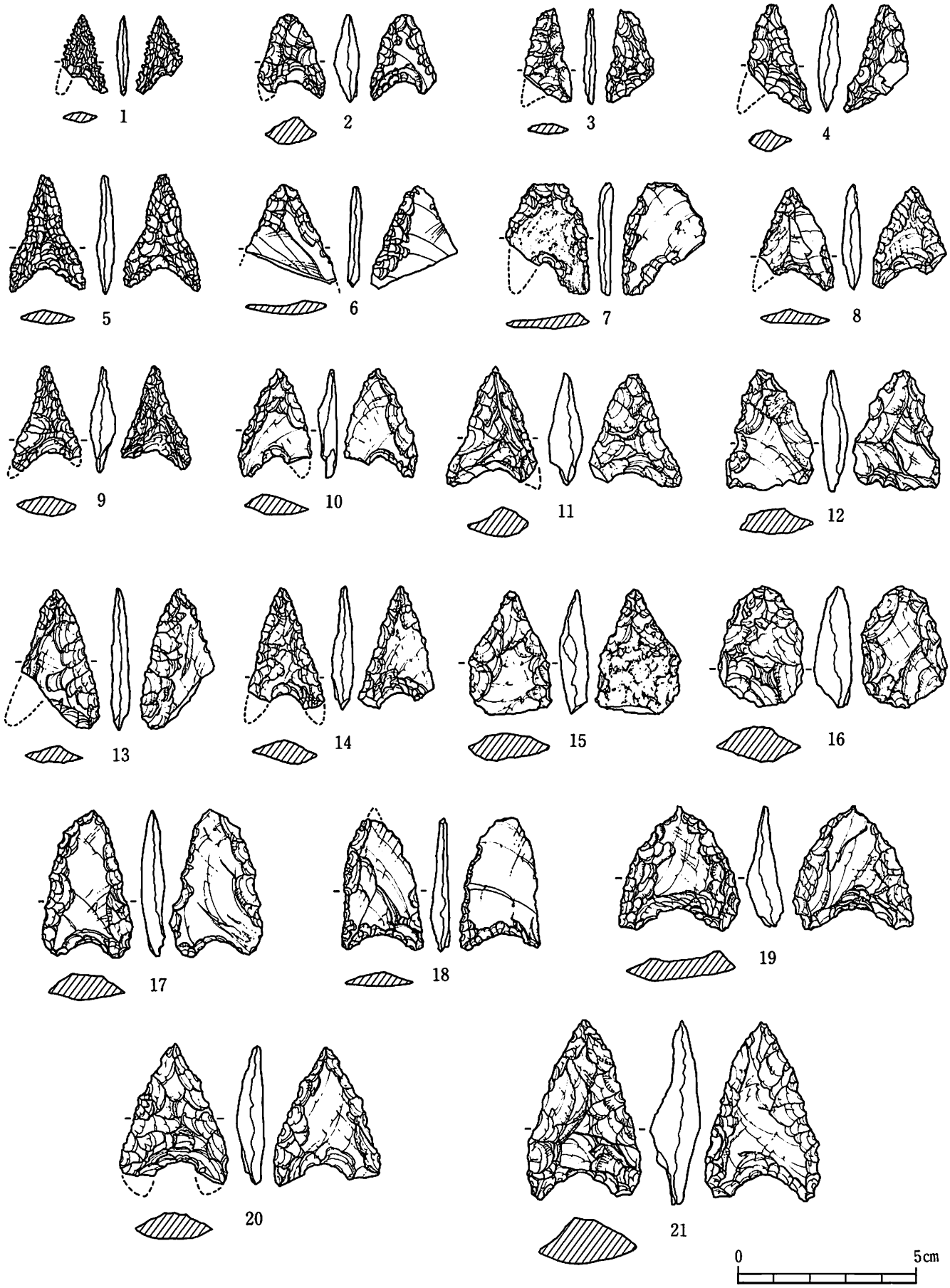
（２）石器（第４～６図、図版３・４上）

石器は総数217点である。内訳は石鏃24点、石匙18点、スクレーパー７点、打製石斧２点、磨製石斧６点、石錘２点、剥片147点、不明11点である。紙面の都合上、ここではそれらの一部を報告する。なお、石器の計測値及び石材は第２表に示した。

石鏃（1～21）　第４図に21点を図示した。全体的にみて粗いつくりのものが多く、未製品のもの以外すべて凹基無茎鏃である。また、海水に洗われ摩耗しているものが目につく。完形は24点中９点と半数にも満たない。片脚を欠損するもの（10点）が最も多く、次いで両脚欠損（３点）、先端部欠損（２点）、下半部欠損（１点）と続く。以下、個別にみていく。

凹基無茎鏃

１は鋸歯鏃で、つくりは丁寧である。2は裏面に剥離面を残し、表面はやや粗いつくりで、中央部が厚みをもつ。３は両面に剥離が入る脚が短いタイプである。４は粗い二次加工が全面に施され、片脚を欠損している。５は細長い石鏃で、非常に丁寧なつくりである。図化していないが、この他に安山岩製の同じような形のものが1点ある。６は剥片の形態を利用し、非常に薄い。下半分を大きく欠損し、石鏃以外のものの可能性もある。７は薄い剥片を利用したもので、摩耗が著しい。基部の抉りが他に比べて深く、片脚を欠損している。８は両面に剥離面を大きく残し、片脚を欠損している。９は二次加工が全面におよぶが、中央部に厚みがある。両脚の先端部を欠損している。10は両面に剥離面を大きく残す。左側辺は素材剥片の薄さを利用し、右側辺には厚みを減じるための調整が入る。11は表面に側辺からの剥離が求心状に入り、薄くしようと試みたことが窺える。裏面にも剥離が施されている。12は非常に粗いつくりをしていることからみて未製品であろう。13は非常に薄く丁寧なつくりで、片脚を大きく欠損する。14も丁寧な二次加工が入る。両脚を欠損しており、特に裏面は摩耗が激しい。15は自然面を残した未製品である。16は粗く形成された未製品で、厚さを十分に減じきれていない。尖頭状石器



第４図　柳貝塚採集石器実測図１

尖頭状石器　と呼ばれる石器かもしれないが、尖頭部は鋭くない。17は両面に大きく剥離面を残す。全周に丁寧な調整を入れて、形を整えている。18は非常に薄い縦長剥片を利用している。二次加工は比較的厚い側辺部・基部のみにとどまり、剥片の形状を利用する。先端部を欠損している。19は両面に剥離面を大きく残し、厚みが不均一な石鏃である。長さと幅がほぼ等しく、大型の部類に入る。摩耗が激しい。20は表面に丁寧な剥離を施し、裏面には大きく剥離面を残している。両脚を欠損しており、磨耗している。21は片面に大きく剥離面を残している。表面では薄く整えようとしたことが窺えるが、中央部が厚いままである。長崎県伊木力遺跡でも同じような法

石銛　量の鏃が報告されており[1]、銛としての機能が想定されていることから、これもその可能性が高い。　（冨永）

石匙（22～31）　第５図に10点を図示した。石匙は図示していないものも含め、すべて安山岩製の横長薄片を素材としている。形態は素材となる薄片の形状に応じて多様であるが、大きく縦匙と横匙に分けることができる。また、大きさによっても大・中・小の３つほどに分類できる可能性がある。

縦匙　縦匙は26・27である。26は小型で、分銅形を呈し、表裏交互剥離による二次調整が施される。27は典型的な縦匙で、海水に洗われたことによる磨耗が著しいが、表裏交互剥離によるやや粗い二次調整が施される。刃部先端を欠損する。

横匙　横匙は22～25・28～31である。二次調整はいずれも丁寧で、ほぼ周縁全体に施される。ほとんどのものは表裏交互剥離が施されているが、24のみ表面に連続して調整が施されたのちに、裏面に調整が施されている。23～25・30はほぼ完形で、22は刃部を、28は摘み部分を、29は摘み部分と刃部を、31は刃部を欠損している。

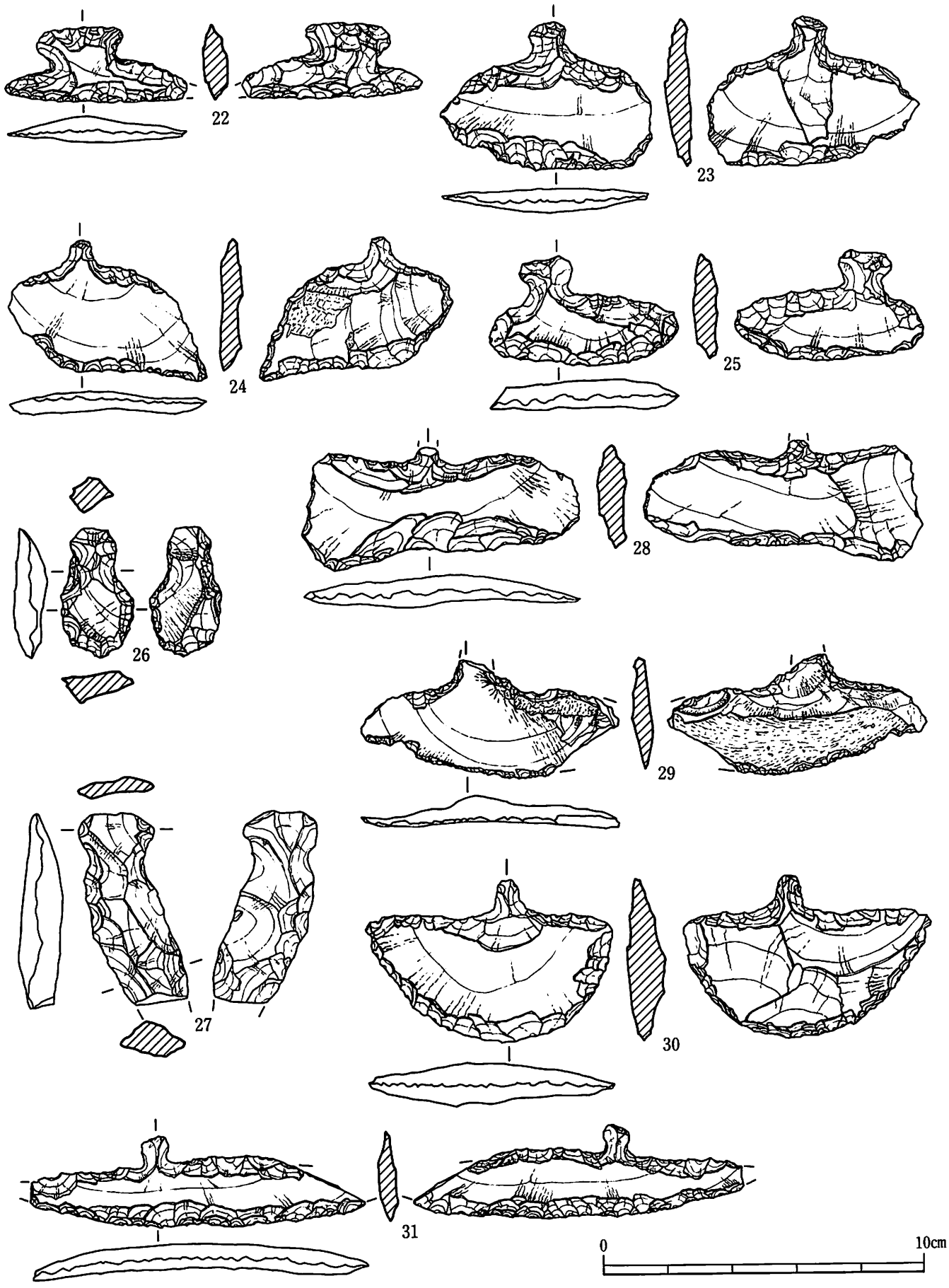
磨製石斧　**磨製石斧**（32～36）　第６図に５点を図示した。いずれも海水に洗われ磨耗しているが、研磨痕が肉眼でも確認できる程度である。以下、個別にみていく。

32は両側縁に剥離が施され、表裏両面とも丁寧に研磨される。さらに両側縁も研磨され、わずかに面が形成されている。刃部には使用痕がみられる。基部を大きく欠損する。33は剥離調整がおこなわれず、全面丁寧に研磨され、両側縁には面が形成される。刃部及び基部を欠損する。34は表裏とも大きく剥離調整される。刃部以外の研磨は粗く、礫面を多く残す。両側縁は研磨されず、したがって面も形成されない。基部を欠損する。35は唯一の完形品で、裏面のみ剥離調整されている。全面が研磨され、両側縁にははっきりとした面が形成される。刃部には使用痕がみられる。36は磨製石斧の基部で、右側縁のみ剥離調整され、左側縁は素材の形状をそのまま生かしている。部分的に研磨されるのみで、表裏とも礫面を残す。

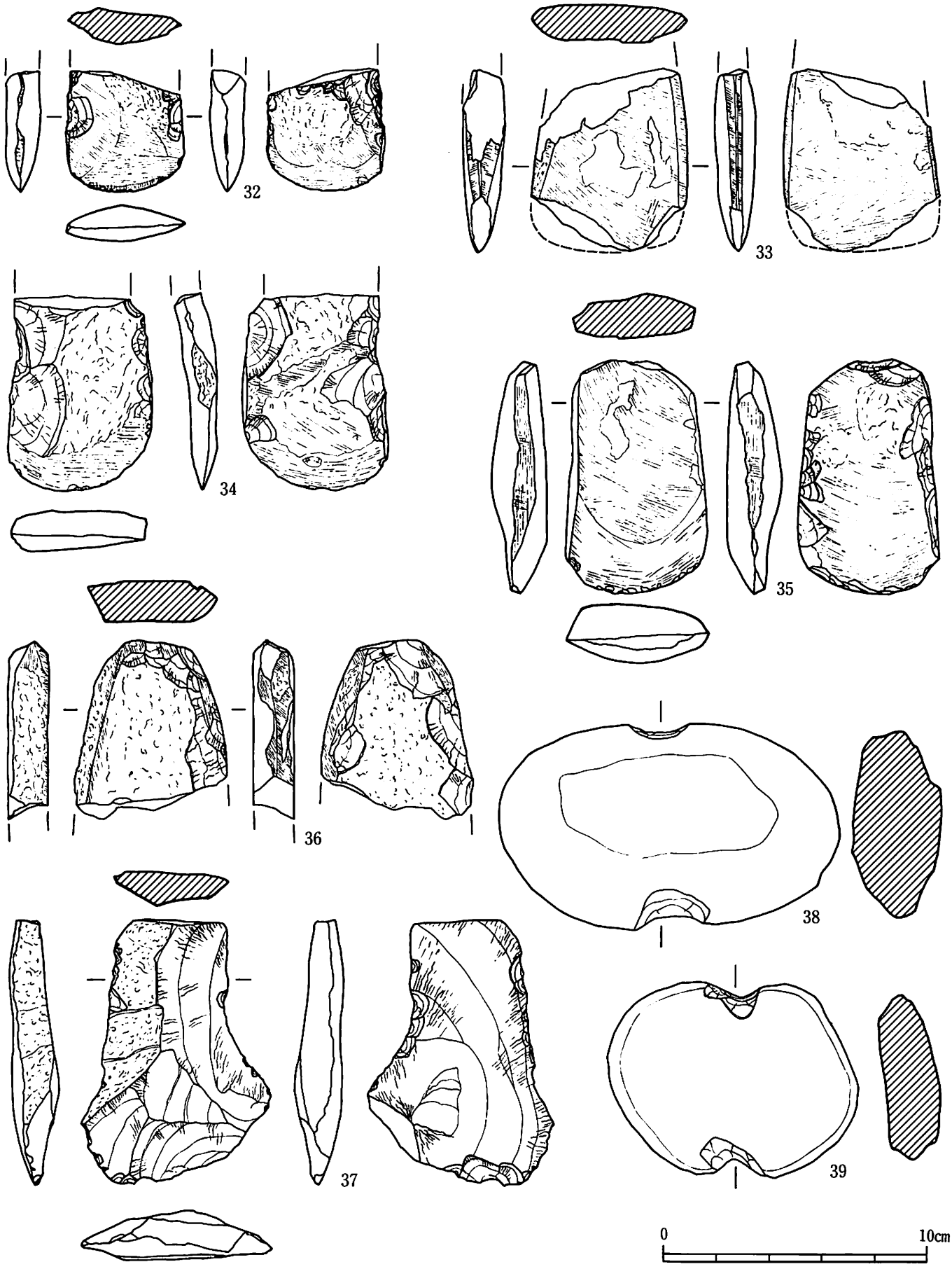
打製石斧　**打製石斧**（37）　第６図に１点を図示した。打点を残したままの横長薄片が素材として使用され、撥形を呈す。表面に粗大な剥離調整がおこなわれ、その後裏面にやや細かい剥離調整がわずかに施される。左側縁には礫面が大きく残っている。図示していないもう１点は、刃部がつくり出されていない未製品で、基部がやや細くなる短冊形を呈す。安山岩製である。

石錘　**石錘**（38・39）　第６図に２点を図示した。38は厚みのある楕円形の礫、39は扁平な円形の礫を素材とする。両者とも上端と下端に表裏からの剥離調整による抉りが入れられている。海水に洗われて磨耗しており、紐ずれの痕は確認できなかった。　（村上）

註（１）福田一志編『伊木力遺跡II』長崎県文化財調査報告書第134集　長崎県教育委員会　1997



第５図　柳貝塚採集石器実測図２



第６図　柳貝塚採集石器実測図３

第２表　柳貝塚採集石器計測表

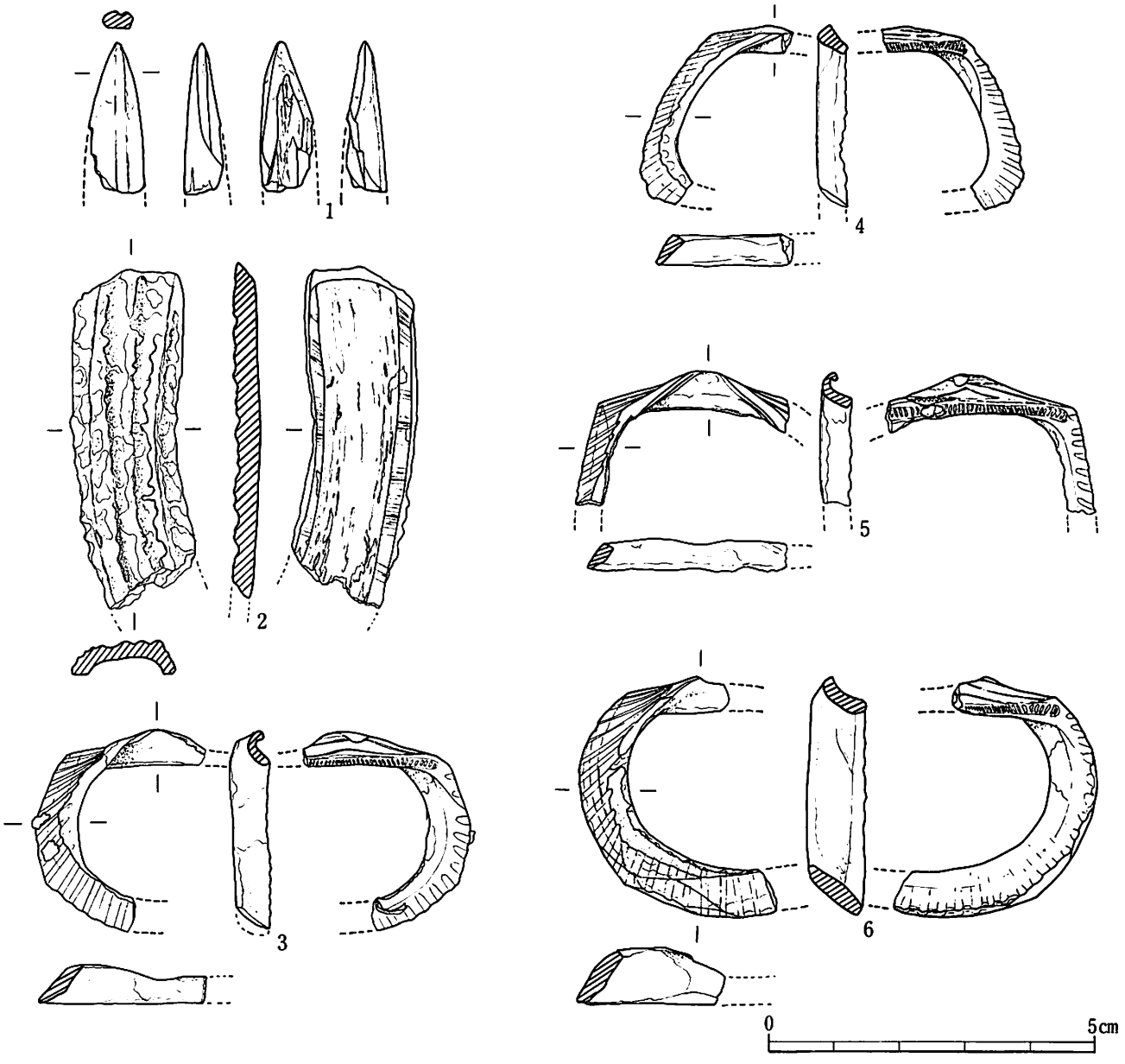
番号	器種	石材※1	欠損部位	長さ（mm）※2	幅（mm）※2	厚さ（mm）※2	重さ（g）※2	備考
第４図１	石鏃	白灰色黒曜石	片脚	(22.0)	(12.3)	3.0	(0.4)	鋸歯鏃
2	石鏃	漆黒色黒曜石	片脚	(23.2)	(18.2)	7.0	(1.8)	
3	石鏃	安山岩	片脚	(25.8)	(14.0)	(3.5)	(0.9)	
4	石鏃	不透明灰色黒曜石	片脚	(30.0)	(17.3)	(5.1)	(1.5)	
5	石鏃	白灰色黒曜石		32.3	21.0	5.0	1.4	
6	石鏃	不透明灰色黒曜石	下半部	(27.0)	(25.5)	(3.5)	(1.7)	
7	石鏃	安山岩	片脚	(30.5)	(23.3)	4.3	(2.3)	
8	石鏃	砂岩	片脚	(28.2)	(20.8)	5.2	(1.9)	
9	石鏃	安山岩	両脚	(28.8)	(18.8)	6.8	(1.6)	
10	石鏃	安山岩	片脚	(29.3)	(20.0)	5.5	(1.9)	
11	石鏃	安山岩	先端部・片脚	(31.1)	(25.0)	(9.6)	(3.9)	
12	石鏃	安山岩		33.0	24.2	7.5	4.7	未製品
13	石鏃	安山岩	片脚	(38.5)	(21.0)	5.8	(2.7)	
14	石鏃	安山岩	両脚	(33.4)	(22.3)	6.5	(2.8)	
15	石鏃	安山岩		34.3	23.5	7.8	5.0	未製品
16	石鏃	安山岩		33.2	23.5	10.8	7.1	未製品
17	石鏃	安山岩		40.5	24.8	7.0	5.4	
18	石鏃	安山岩	先端部	(36.7)	22.5	5.3	(3.2)	
19	石鏃	安山岩		34.8	33.3	10.0	6.7	
20	石鏃	安山岩	両脚	(38.2)	29.2	7.0	(5.9)	
21	石鏃	安山岩		49.9	31.8	13.8	11.8	
第５図22	石匙	安山岩	刃部先端	23.9	(55.8)	8.2	(7.0)	横匙
23	石匙	安山岩		46.3	65.5	7.9	21.1	横匙
24	石匙	安山岩		43.8	60.1	6.5	14.6	横匙
25	石匙	安山岩		34.0	58.2	9.0	14.2	横匙
26	石匙	安山岩		40.3	22.0	10.5	7.6	縦匙
27	石匙	安山岩	刃部先端	(59.5)	32.5	13.0	(17.9)	縦匙
28	石匙	安山岩	摘み部	(37.9)	86.8	10.0	(25.4)	横匙
29	石匙	安山岩	摘み部・刃部先端	(36.8)	(80.0)	10.5	(16.8)	横匙
30	石匙	安山岩		50.0	67.0	13.6	35.4	横匙
31	石匙	安山岩	刃部先端	28.4	(102.6)	10.4	(17.2)	横匙
第６図32	磨製石斧	頁岩	基部	(45.8)	44.8	13.8	(35.3)	
33	磨製石斧	蛇紋岩	刃部・基部	(68.8)	59.0	16.0	(85.5)	
34	磨製石斧	玄武岩	基部	(73.8)	54.5	15.5	(67.7)	
35	磨製石斧	玄武岩		88.0	53.8	21.2	148.1	
36	磨製石斧	安山岩	刃部	(67.0)	57.3	16.0	(96.8)	
37	打製石斧	安山岩		99.6	70.3	18.6	106.6	
38	石錘	砂岩		76.3	129.0	34.0	473.0	
39	石錘	砂岩		73.5	94.8	23.3	229.6	

※１石材は報告者の肉眼観察による。　※２各計測値のうち（　）付きのものは残存値を示す。

（３）貝製品、骨角器および動物遺存体（第７図、図版４中・下）

骨角器（１・２）　１はシカの中足骨が素材として使用されている。骨幹部が縦に割断され、先端が研ぎ出されている。先端のみ風化しており、これが使用された時の状況を反映したものである可能性もある。用途は不明である。２はシカの角が素材として使用されている。縦に割断された角の内面を研磨したものである。外面にも一部研磨痕が認められる。先端は磨滅する。これは使用によるものの可能性が高いが、断定はできない。用途は不明だが、その形態と先端部の状態から、ヘラ状工具のようなものとして使用された可能性が高い。　骨角器

貝製品（３～６）　貝製腕輪が９点採集されているが、ここでは比較的残存状態のよい４点を報告する。３は割れ面に沿って研磨されている。全体的に風化しており、一部カキが付着する。４は割れ面に沿って入念に研磨されている。外面も研磨されており、精巧なつくりである。５は割れ面に沿う箇所と腹縁に粗い研磨痕が認められ、粗雑なつくりといってよい。６は割れ面に沿う場所と外面の一部を研磨されている。内面にも腹縁に沿って研磨痕が認められ、精巧なつくりである。３～６はすべてアカガイが使用されており、これは有明海沿岸など砂泥質の沿岸で容易に捕獲できる種である。そのため有明海沿岸地域の貝塚においては、アカガイは食料残滓としての出土量も多い貝種である。　貝製品



第７図　柳貝塚採集骨角器・貝製品実測図

動物遺存体　**動物遺存体**（図版４下）　動物骨が採集されている。保存状態の良いものもあるが、大半は風化のため表面が脆くなっている。またほとんどが細骨片であるが、同定可能なものについて報告する。採集された骨の動物種を以下に示す。

イノシシ　*Sus scrofa*

ニホンジカ　*Cervus nippon*

イルカ類　*Delphinidae* sp.

イノシシは下顎骨、肩甲骨、上腕骨、踵骨、脛骨などがある。脛骨は近位部で、ここに焼痕が認められる。ニホンジカは角、肩甲骨、上腕骨、脛骨などがある。角は先端部が２点で、うち１点は内部が空洞になっていることが認められる。これが人工的なものか、単に風化したことによるものかは不明である。イルカ類は歯牙が１点で、歯根部に孔があいている。これは貫通しておらず、そのためこれも人工的なものか自然作用によるものかは不明である。（中川）

二　轟貝塚出土の動物遺存体および貝製品

1．資料報告に至る経緯

資料報告に至る経緯

轟貝塚は、熊本県宇土市宮庄居屋敷に所在する、縄文時代前期を主体とする貝塚である。轟貝塚は1958年、小林久雄氏らの調査隊により発掘がおこなわれた。この調査成果は、松本雅明・富樫卯三郎両氏が「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」(1961年)[1]でまとめている。この調査で出土した遺物の一部は、熊本大学文学部考古学研究室に保管されており、その中には土器をはじめ、石器、貝製品、動物遺存体がある。ところがこの調査では、轟式土器の編年に主眼を置いていたために[2]、土器以外の遺物に関してはほとんど報告されていない。そこでここでは、未整理および未報告の動物遺存体および貝製品について報告する。

2．動物遺存体（図版５上）

動物遺存体

轟貝塚で検出されている動物遺存体は、獣・魚骨および貝類である。検出法はいずれもピックアップ法によるものである。動物種を以下に示す。

I．哺乳類

イノシシ　*Sus scrofa*

ニホンジカ　*Cervus Nippon*

イヌ　*Canis familiaris*

ニホンザル　*Macaca fuscata*

アナグマ　*Meles meles*

ウシ　*Bos taurus*

II．鳥類

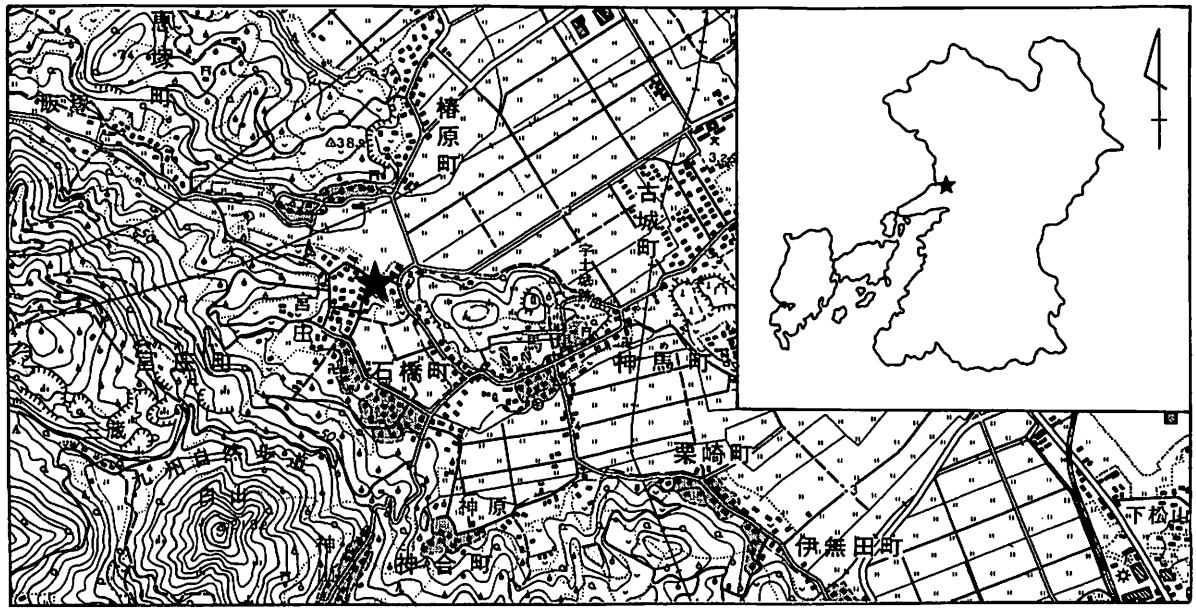
ツル科の一種　*Grus* sp.

III．魚類

クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli*

スズキ　*Lateolabrax japonicus*

サメ類　*Lamina* sp.



第８図　轟貝塚位置図

0　1km

IV. 貝類

マガキ　*Ostrea gigas*
アカガイ　*Anadara broughtonii*
ハイガイ　*Anadara granosa bisenensis*
アサリ　*Tapes japonica*
ハマグリ　*Meretrix lusoria*
イボニシ　*Thais clavigera*
ウミニナ　*Batillaria multiformis*
シオフキ　*Mactra veneriformis*
アカニシ　*Rapana thomasiana*
スガイ　*Lunella coronata coreensis*
ウニレイシ　*Purpura echinata*
テングニシ　*Pugilina ternatana*

哺乳類

哺乳類　ニホンジカが最も多く、総数114片（1395.0g）である。上腕骨遠位部、距骨、脛骨遠位部にカットマークが認められるものがある。イノシシは総数86片（1089.7g）である。上腕骨遠位部および尺骨近位部にカットマークが認められるものがある。他遺跡ではよく検出される下顎骨などの頭部骨は、ニホンジカ、イノシシともに非常に少ない。イヌは肋骨、脛骨が検出されている。脛骨は完形のものがあり、その計測値からこれは柴犬程度の小型犬の範疇に入るものである。ニホンザルは上腕骨、橈骨、寛骨、中足骨の4点が検出されている。アナグマは上腕骨1点である。また、脛骨に形態のみなれないものがあったが、アナグマのものである可能性が高い。ウシは下顎骨があるが、これは後世の混入であろう。

鳥類

鳥類　ツル科の上腕骨が1点である。冬期飛来した際捕獲されたものであろう。また、これは骨幹部で割れており、割れ口付近に焼けた痕が認められる。

魚類

魚類　クロダイは前上顎骨および歯骨、スズキは歯骨が検出されている。いずれも内湾に棲息するもので、有明海沿岸地域の遺跡ではよく出土する。サメ類の椎骨も1点検出されている。

貝類

貝類　ハイガイ、アカガイが多い。轟貝塚の貝類はほとんどが砂泥に棲息する種である。マガキ、テングニシの中に、現生のものと比較して非常に大型のものがある。この点は、縄文時代の貝類質食糧から得る熱量を計算する際には、考慮されるべき点であろう。

貝製品

3．貝製品（第9図1～4、図版5上）

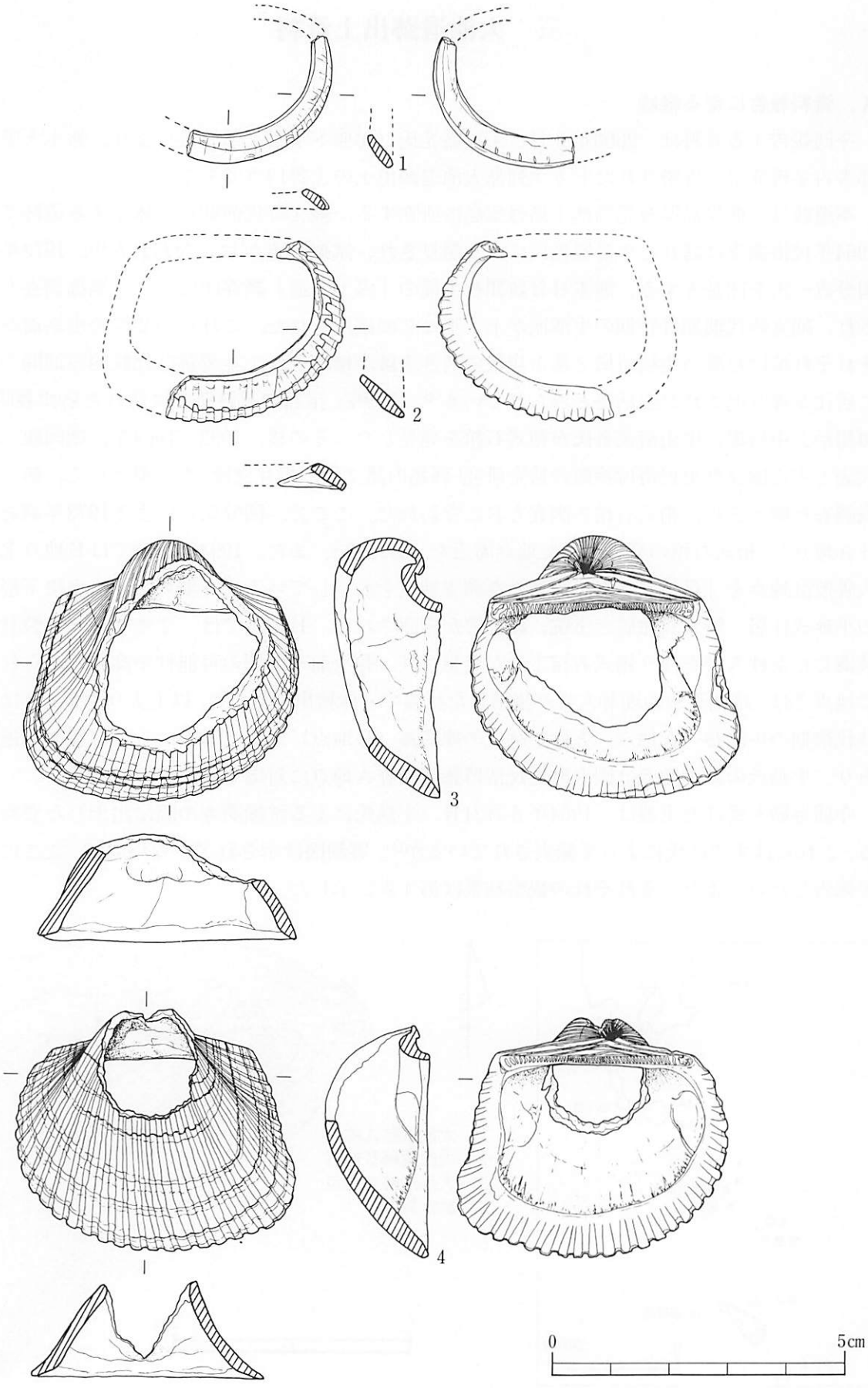
貝製腕輪が2点検出されている。1は内外ともに丁寧に研磨されている。フネガイ科製。2は外面を研磨されているが、1ほど精巧なつくりではない。アカガイ製。3・4はいずれもアカガイである。3は内側から穿孔されている。腕輪製作途中で失敗し廃棄されたものか。4は外側から穿孔されている。その目的は不明だが、これも腕輪未製品の可能性が高い。（中川）

註（1）松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第3号　日本考古学会　1961
（2）註（1）に同じ
（3）動物遺存体を同定するにあたり、鹿児島大学西中川駿先生に多大な御教示を頂いた。

第3表　轟貝塚の動物遺存体部位別骨片数

	角	頭骨		下顎骨		歯牙	椎骨	肋骨	肩甲骨		上腕骨			橈骨		尺骨		中手骨			寛骨	大腿骨			脛骨			距骨		踵骨		中足骨			その他	計
		L	R	L	R				L	R	L	R	不	L	R	L	R	L	R	不		L	R	不	L	R	不	L	R	L	R	L	R	不		
イノシシ		1	3	1	1	12	4	7	3	3	2	10		5	1	3	2	4	2		2	1	2		4	5	1			2		2			3	86
ニホンジカ	7			1	1	3	6	3	7	4	5	5	4	5	3			2	3	3	8	5	7	1	7	6		3	2	3	3	2		2	3	114
イヌ								1																		2										3
アナグマ											1															1										2
ニホンザル												1									1											1				4
ウシ					1																															1
ツル科											1																									1
																																				211

※Lは左、Rは右、不は不明を表す。　※その他は手根骨、基節骨、末節骨を含む。



第９図　轟貝塚出土貝製品実測図

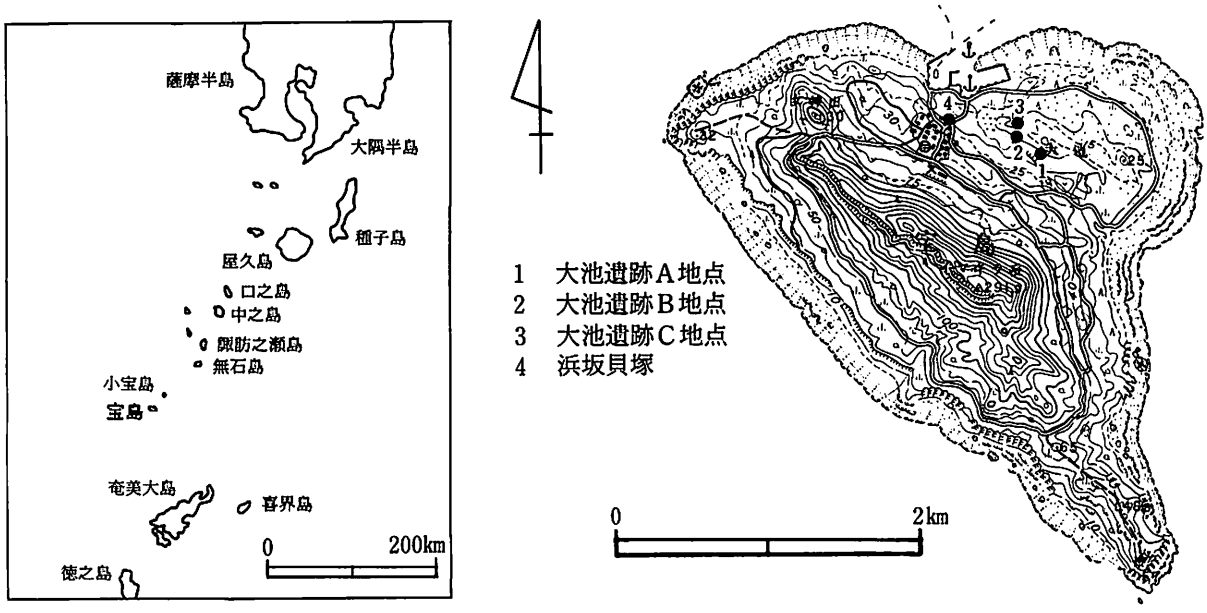
三　大池遺跡出土資料

1．資料報告に至る経緯

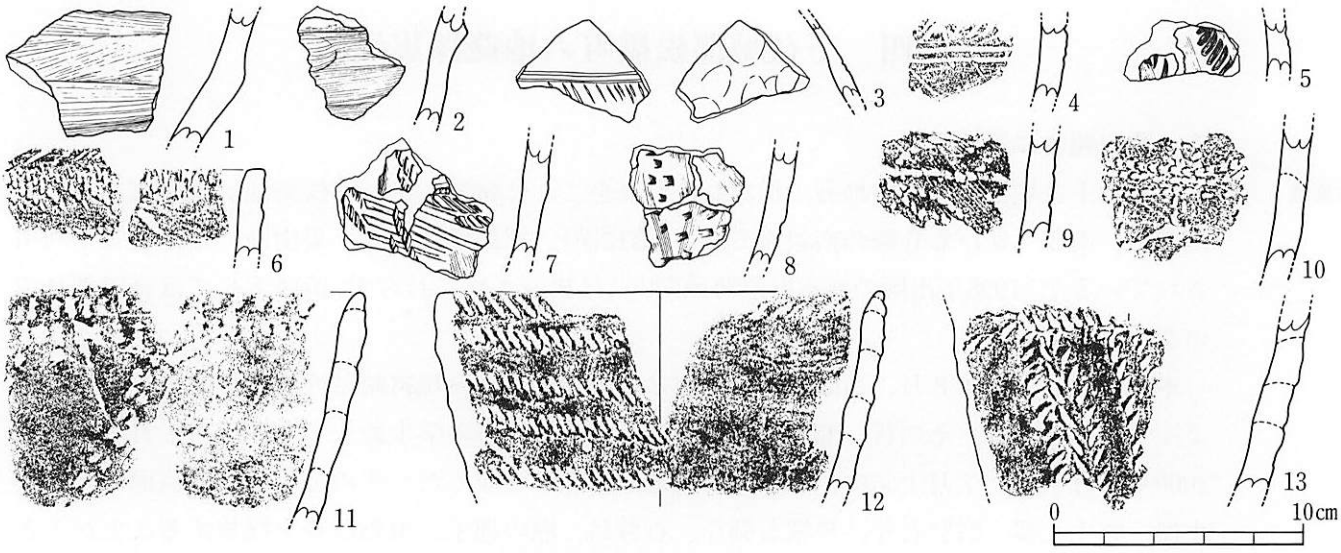
今回報告する資料は、2000年２月、牛島盛光氏（元熊本学園大学教授）より、熊本大学文学部考古学研究室に寄贈されたトカラ列島大池遺跡出土の土器13点である。

遺跡の概要　本遺跡は、鹿児島県鹿児島郡十島村宝島に所在する、縄文時代前期を主体とする遺跡である。1964年民俗調査に訪れた牛島盛光氏により発見され、試掘調査がおこなわれた[1]。1973年には、国分直一氏を団長とする、熊本日日新聞社主催の「海上の道」調査団によって発掘調査が実施され、縄文時代前期併行期の生活面が上、下に２面確認された。これらの２枚の生活面からは、それぞれ焼けた礫の集積遺構２基と複数の焚き火跡が検出され、本遺跡は比較的短期間のうちに居住が繰り返された生活跡とみられている[2]。1979年、宝島の遺跡踏査に訪れた島津義昭、野田拓治、中村愿、中山清美各氏が箱式石棺を発見した。その後、1993・1994年、朝岡康二氏を代表とする国立歴史民俗博物館の特定研究「列島内諸文化の相互交流」の一環として、第二次発掘調査が開始され、箱式石棺の調査もおこなわれた。ここで、国分氏らによる1973年調査地を「Ａ地点」、箱式石棺の発見された地点周辺を「Ｂ地点」、また、1994年調査ではＢ地点北西の人骨散乱地点を「Ｃ地点」とし、新たな調査地点を設定している。Ａ地点では、室川下層式期の平地式住居、竪穴式住居と土坑、礫群等が確認された。Ｂ地点では、オオツタノハ製貝輪を装着した女性人骨を伴う箱式石棺１基が発見され、弥生前～中期の可能性が高いとみられる。Ｃ地点では、時期不明の埋葬人骨が集積した状態で一体検出された[3]。以上より、本遺跡は縄文時代前期の生活跡（Ａ地点）と弥生時代の埋葬跡（Ｂ地点）が地点を異にして存在する遺跡であり、牛島氏の調査地点は国立歴史民俗博物館調査Ａ地点に対応することがわかる。

今回寄贈を受けた土器は、1964年８月21日、牛島氏による試掘調査の際に出土した資料である。これらはすでに氏によって発表されているが[4]、実測図は示されていないので、ここに改めて報告したい。また、それぞれの観察結果は第４表に示した。



第10図　大池遺跡位置図



第11図　大池遺跡出土土器実測図

2．土器（第11図１～13、図版６）

１・２は表土から15～25cm（上層）、３は25～35cm（下層）、４～13は35～65cm（下層）の深さから出土した。牛島氏は下層土器を第一類（３）と第二類（４～13）に分類されている[5]。 土器

下層第二類は高宮廣衛氏による室川下層式[6]の範疇におさまる。注目されるのは上層出土土器と下層第一類である。下層第一類は十島村浜坂貝塚[7]、与論町上城遺跡[8]に類例があり、縄文時代晩期に相当する。１と２もこの時期に対応する可能性が高い。大池遺跡Ａ地点の上限は縄文時代晩期併行期まで下るものとみられ、従来までの成果に新知見を与える資料である。

最後に、貴重な資料を寄贈してくださった牛島氏と土器胎土中の鉱物について御教示いただいた松本幡郎先生に謝意を示したい。

（新里）

註（１）牛島盛光「宝島大池遺跡の調査概報」『中国四国歴史・地理学協会、西日本史学会合同秋季学術大会プログラム』　1964
（２）平野芳英・渡辺一雄編「２．宝島大池遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第１集　熊本大学文学部考古学研究室　1994
（３）宝島大池遺跡発掘調査班「吐噶喇列島宝島　大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集　国立歴史民俗博物館　1995
宝島大池遺跡発掘調査班「トカラ列島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集　国立歴史民俗博物館　1997
（４）註（１）に同じ
（５）註（１）に同じ
（６）高宮廣衛「室川下層式土器と南島」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』潮見浩先生退官記念事業会　1993
（７）三友国五郎・河口貞徳「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要』第11巻　1962、『河口貞徳先生－古稀記念著作集－』下巻河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会　1981に再録
（８）吉永正史・堂込秀人編「上城跡、上城遺跡」『与論町埋蔵文化財発掘調査報告書』第１集　与論町教育委員会　1990

第４表　大池遺跡出土土器観察表

番号	器形	胎土	色調※1	調整※2	層位	牛島分類
第11図1	深鉢	緻密(石英)	褐色／褐色	丁寧なナデ／ナデ	上層	無文土器
2	深鉢	緻密(褐鉄鉱)	にぶい赤褐色／暗褐色	丁寧なナデ／ナデ	上層	無文土器
3	壷	緻密	褐色／褐色	丁寧なナデ／指おさえ	下層	下層第一類
4	深鉢	緻密(石英　褐鉄鉱)	赤色／暗褐色	丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類
5	深鉢	砂質(石英　カオリナイト)	暗褐色／黒褐色	丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類
6	深鉢	砂質(カオリナイト)	赤黒色／赤黒	丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類
7	深鉢	砂質	明褐色／にぶい褐色	丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類
8	深鉢	砂質(カオリナイト)	黒褐色／赤褐色	ナデ／ナデ	下層	下層第二類
9	深鉢	砂質(カオリナイト)	赤色／極暗褐色	貝殻条痕調整後ナデ／ナデ	下層	下層第二類
10	深鉢	砂質(石英　斜長石)	暗赤灰／橙色	貝殻条痕調整後丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類
11	深鉢	緻密(褐鉄鉱　カオリナイト)	橙色／橙色	丁寧なナデ／丁寧なナデ	下層	下層第二類
12	深鉢	砂質(カオリナイト)	暗褐色／にぶい赤褐色	条痕調整後丁寧なナデ／条痕調整後ナデ	下層	下層第二類
13	深鉢	砂質(石英)	暗赤褐色／赤灰	条痕調整後丁寧なナデ／ナデ	下層	下層第二類

※１外面/内面。　※２外面/内面。

四　下益城郡松橋町六地蔵採集資料

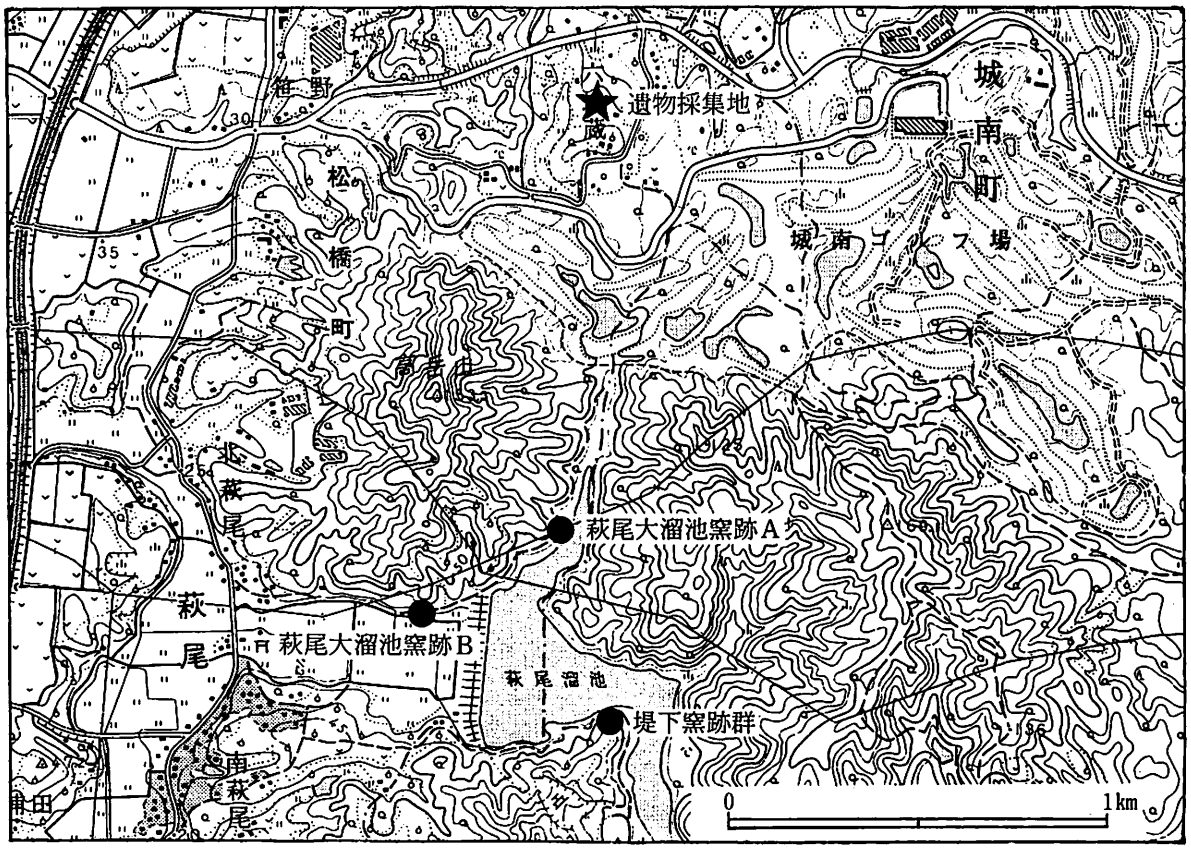
1．資料報告に至る経緯

採集地

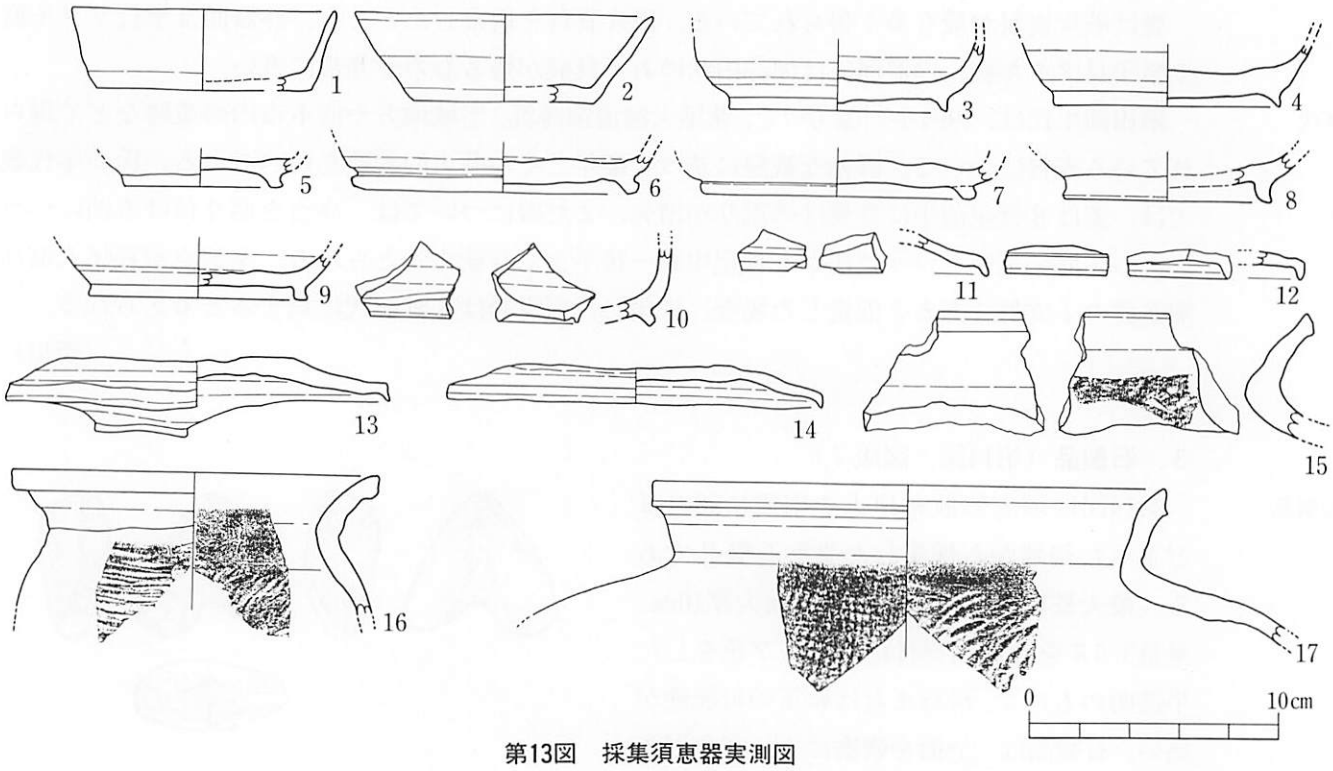
熊本県下益城郡松橋町六地蔵で採集した資料をここに報告したい。採集地は城南ゴルフ場北西部の、南側へ延びる丘陵の南斜面である(第12図)。採集地は現在、果樹園、畑地として利用されているが、1998年出版の熊本県遺跡地図[1]には掲載されておらず、遺跡としては登録されていない。

本地点は、1996年８月、当時熊本大学在学中の藤木聡氏（現宮崎県埋蔵文化財センター）によって発見された。その後、熊本大学文学部考古学研究室の学生数人で、1996年８月～９月、2000年２月下旬、７月上旬に、計５回の現地踏査をおこなった。その結果、丘陵斜面にて縄文土器、弥生土器、磨製石斧、黒曜石剥片、石製品、甑の把手、須恵器等を採集することができた。踏査時、散布している遺物については、果樹園造成時に、土ごと持ちこまれた可能性が考えられた。そのため2000年７月の踏査の際、付近の住民の方に内情をうかがったところ、過去にそうした事実は無いことが判明したため、当地が未登録の遺跡であることを確信した。また、付近には萩尾大溜池窯跡群[2]が存在し、それとの関連が考えられたため、採集した資料を公表する運びとなった。

これら採集資料のうち、今回報告するのは、須恵器17点と石製品１点である（第13・14図)。須恵器についての観察結果は第５表に示した。なお、資料は現在、熊本大学文学部考古学研究室にて保管している。　　（新里）



第12図　遺物採集地点および関連遺跡位置図



第13図　採集須恵器実測図

2．須恵器（第13図１～17、図版７）

採集須恵器

須恵器は、杯、碗、蓋、甕の４器種で構成される。１・２は杯で体部下半にヘラケズリ痕を残すものの、内外面ともに丁寧な回転ナデが施されている。底部はヘラ切りによって回転台から切り離され、丁寧なナデ調整がおこなわれる。３～10は碗の高台部である。高台は底部端に貼りつけられ、断面が三角形状のもの（３・４）と方形状のもの（５～６）の２種類が存在する。７はヘラ切りによって回転台から切り離された後、ヘラ状の工具で一条の溝が刻まれ、粘土紐が貼り付けられ、高台が形成される。６・７は高台と体部の境をヘラによって調整され、明瞭な稜線が残る。11～14は蓋である。口縁端部を下方へ引き下げるため、内面に稜線がめぐる。外器面にはヘラケズリ痕が明瞭にのこる。15～17は甕である。肥厚した口縁となる資料である。

第５表　採集須恵器観察表

番号	器種	口径※1	外器面調整	内器面調整	切り離し	備考
第13図1	杯	10.5	弱いヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
2	杯	12.0	弱いヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	赤焼け
3	碗	8.7	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
4	碗	9.2	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	生焼け
5	碗	6.3	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	
6	碗	10.5	高台部ヘラ彫り	回転ナデ	ヘラ切り	
7	碗	11.0	高台部ヘラ彫り	回転ナデ	ヘラ切り	
8	碗	8.4	回転ナデ	回転ナデ	不明	
9	碗	15.2	弱いヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	見込みは不定方向のナデ
10	碗	15.2	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	不明	
11	蓋	15.2	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	天井部に葉痕あり
12	蓋	15.2	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	生焼け
13	蓋	不明	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	不明	
14	蓋	不明	ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	不明	
15	甕	不明	ヘラケズリ後回転ナデ	同心円タタキ	不明	
16	甕	14.5	平行タタキ	同心円タタキ		赤焼け
17	甕	20.5	格子目タタキ	同心円タタキ		

※１単位はcm。碗については高台径を示している。

甕は破片資料が最も多く得られている。破片資料を観察したところ、外器面は平行タタキ痕や格子目タタキ痕、内器面には同心円状のあて具痕が残るものが非常に多い。

年代

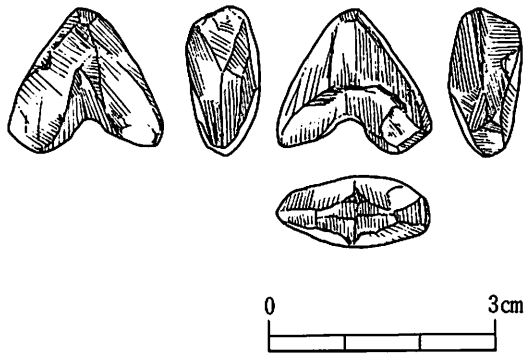
網田龍生氏は、1994年の論考[3]で、萩尾大溜池窯跡群、宇城地方や熊本市内の遺跡などで得られている資料について、詳細な観察に基づく編年とその歴史的変遷を述べている。氏の年代観では、蓋は８世紀前半に身受けの返りが消失、また碗については、高台を貼り付ける前にヘラによって溝を刻むという技法が８世紀中葉～後半まで存続するとされる。本地点が萩尾大溜池窯跡群の１支群であると仮定した場合、採集した須恵器は８世紀代に属すると考えられる。

（新里）

３．石製品（第14図、図版７）

石製品

第14図は須恵器散布地点の南側に50mほど下った畑地から採集した異形石製品である。最大長19㎜、最大幅21㎜、最大厚10㎜、重量3.6ｇを計る。石材は、オリーブ色をした半透明のもので、滑石または軟玉の可能性が高い。石製品は、全面を研磨によって整形され、その最終形態はハート形に近い。右側の突起は、左側のそれに比べ厚く、左右でやや不揃いな格好となる。本製品の時期、性格については全くの不明である。　（藤木）



第14図　採集石製品実測図

４．遺跡の性格

遺跡の性格

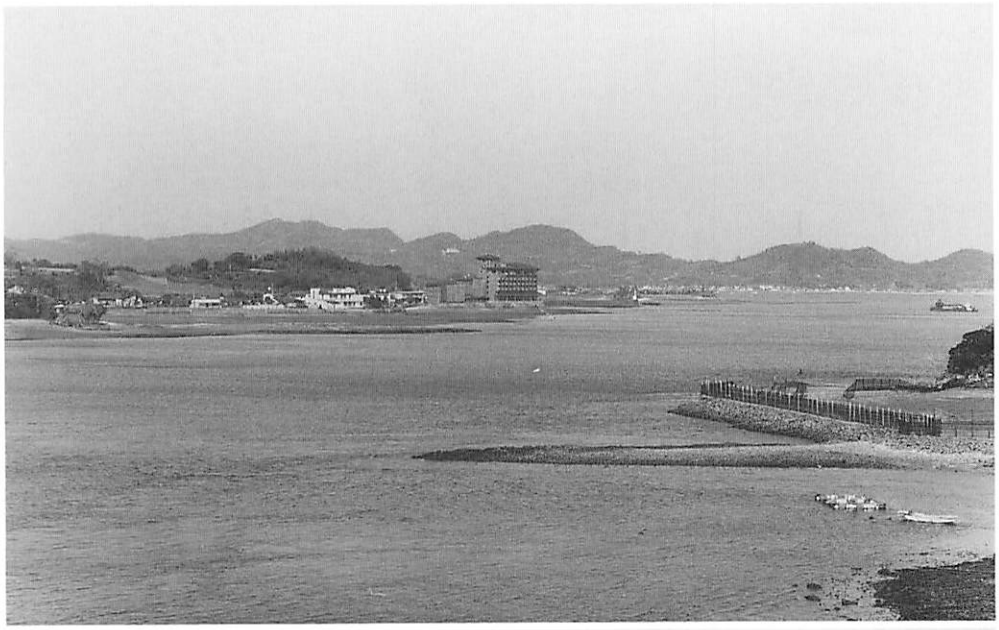
本地点の性格を推測したい。①採集品には、著しく焼け歪んだものや焼成が悪く、赤焼けのものが多い、②採集地が丘陵斜面に立地する、③付近に萩尾大溜池窯跡群や堤下窯跡群など古代～中世にかけての窯跡が多く存在する、という３つの特徴から、本地点は窯跡であった可能性が非常に高い。今後、窯体の実態把握が急務である。さらに、流通範囲や時期など、消費遺跡との対応関係の把握や胎土、焼成、製作技術、器種構成などによる宇城窯跡群内での位置付けが課題となろう。また、縄文時代、弥生時代、古代の遺物も採集されているので、長期間生活跡としても利用されていたことがうかがえる。

前述したように、本地点は1998年の時点で遺跡としては登録されていない。本遺跡は古代窯業史のみならず縄文から弥生時代にかけての集落論等、歴史的にみて大きな重要性をもつものであると考えられる。その重要性を考慮すると、遺跡として相応の扱いを受けるべきであり、逸早い登録が望まれる。　（新里）

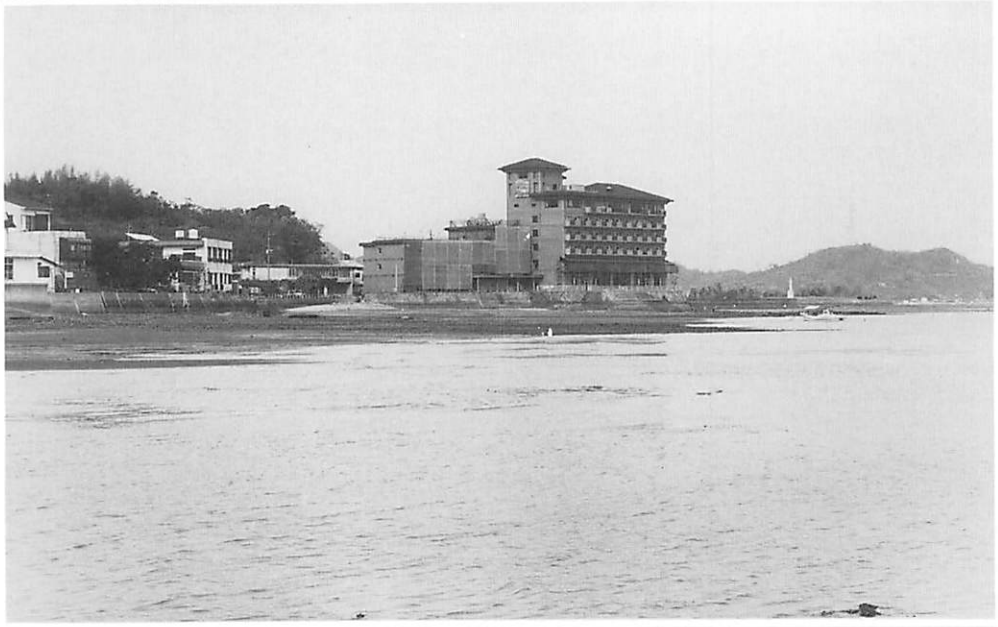
註（１）熊本県教育委員会編『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会　1998
（２）註（１）に同じ
（３）網田龍生「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集　龍田考古学会　1994

図　　版

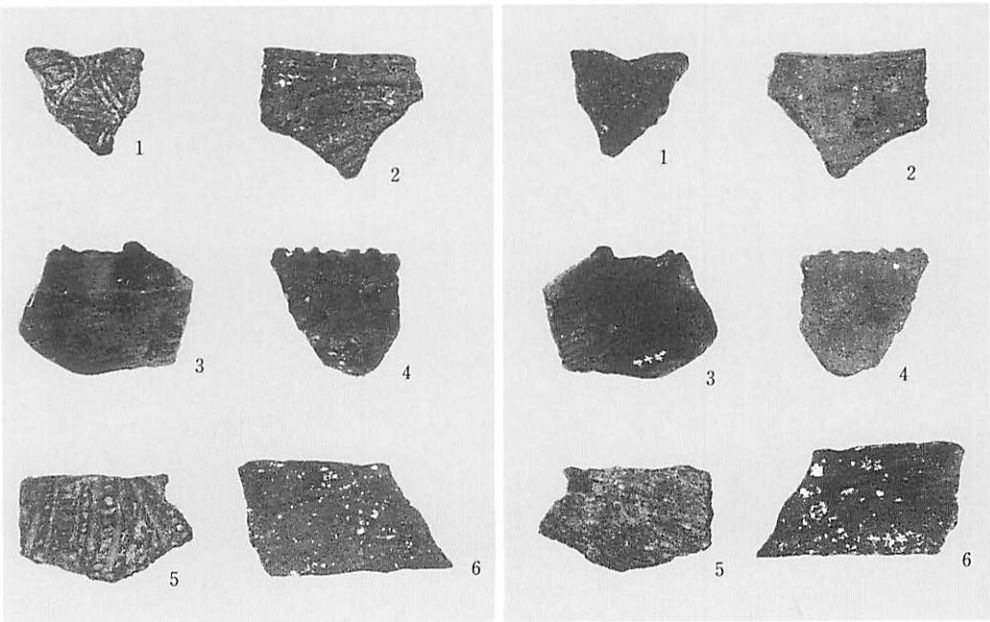
図版 1



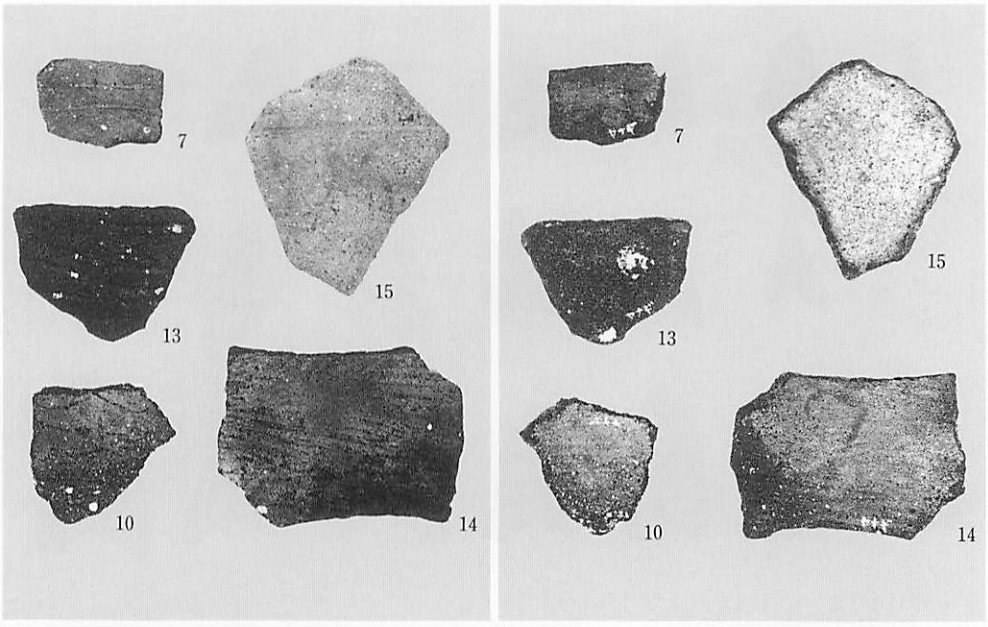
柳貝塚遠景（西より）



柳貝塚近景（西より）

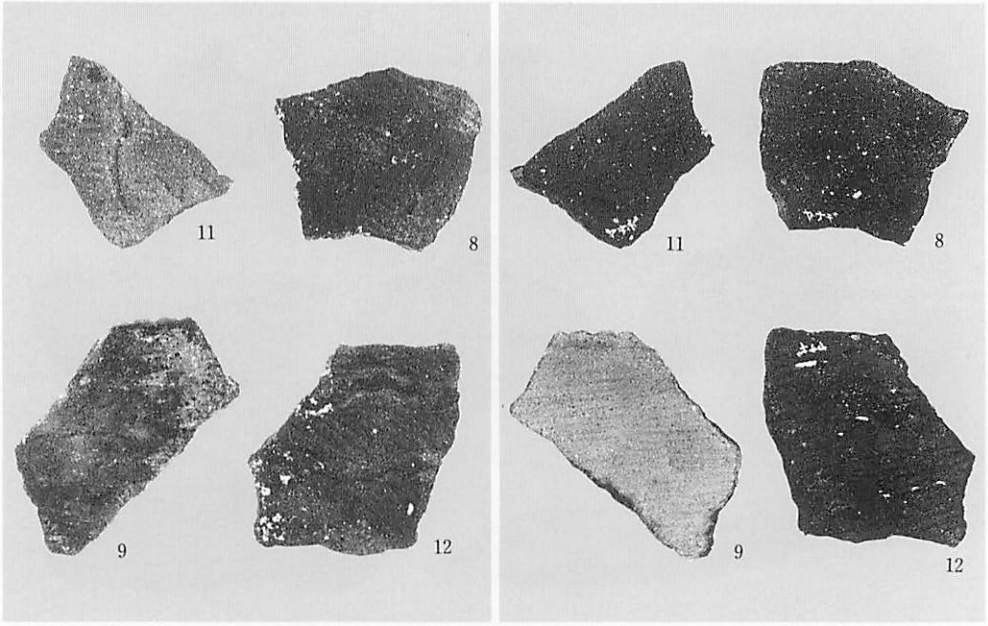


柳貝塚採集土器（1）
左）口縁部、胴部（表）
右）口縁部、胴部（裏）

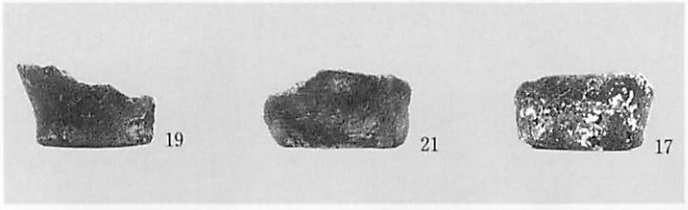


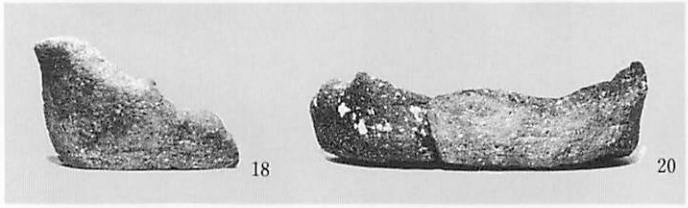
柳貝塚採集土器（2）および土製品

左）胴部（表）
右）胴部（裏）

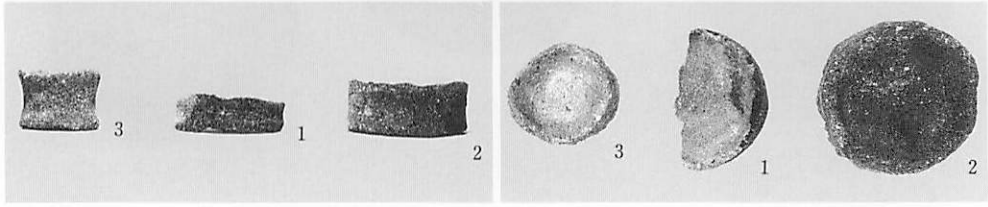


左）口縁部、胴部（表）
右）口縁部、胴部（裏）



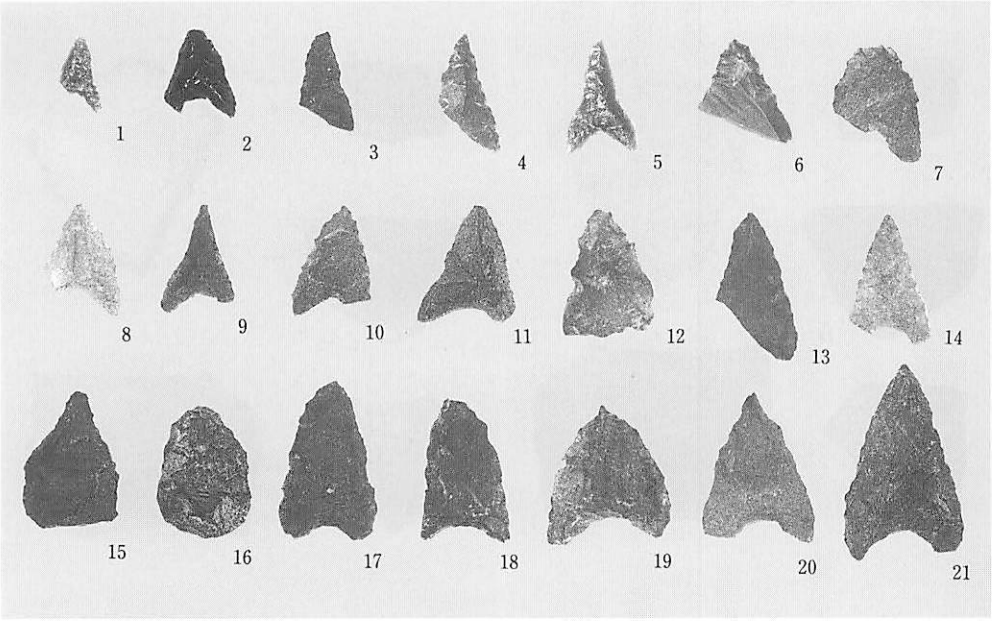


底部

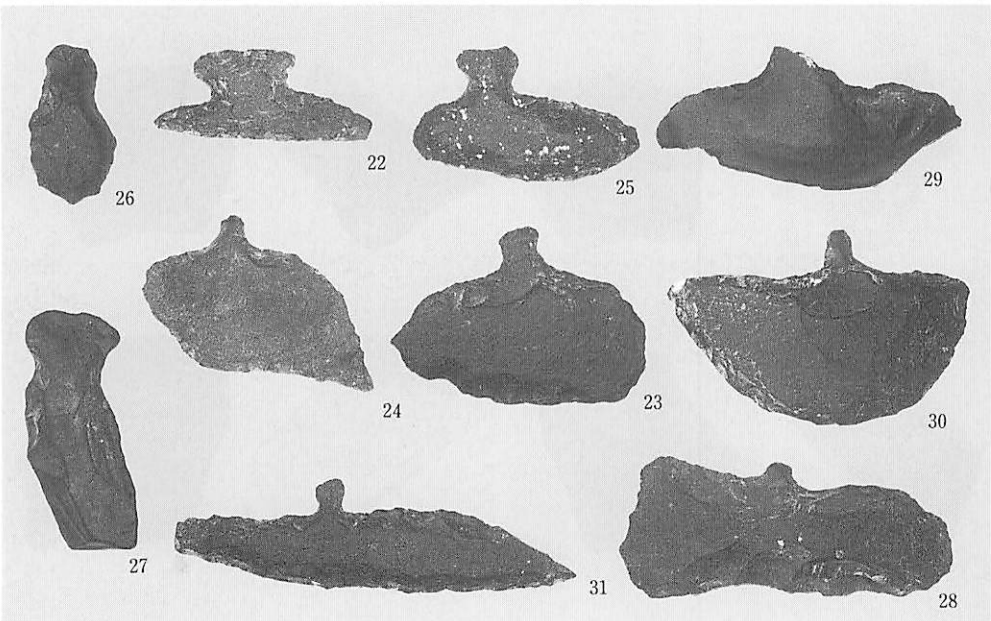


左）土製品（側面）
右）土製品（上面）

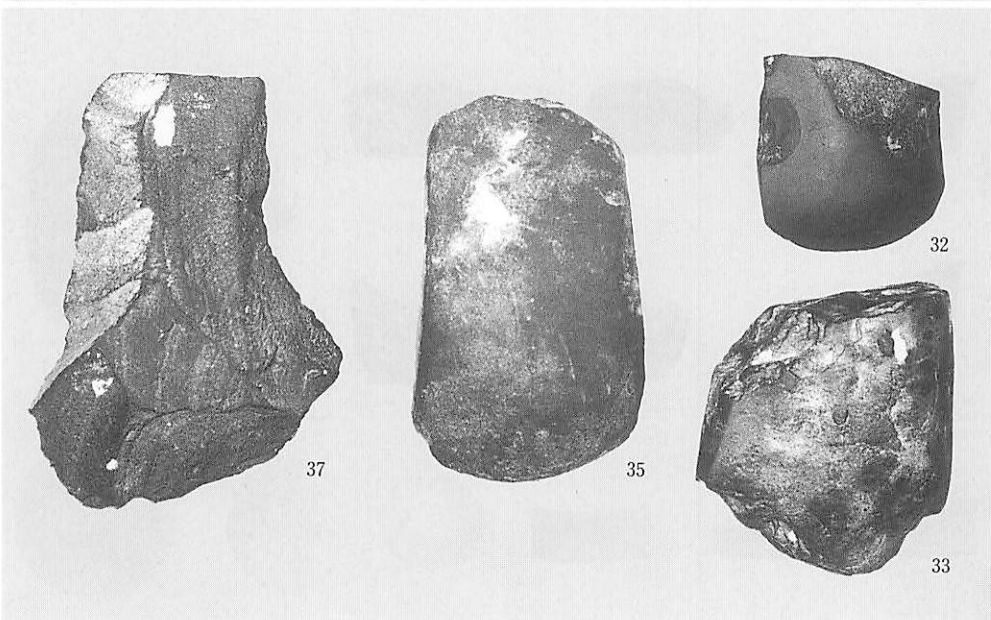
図版 3



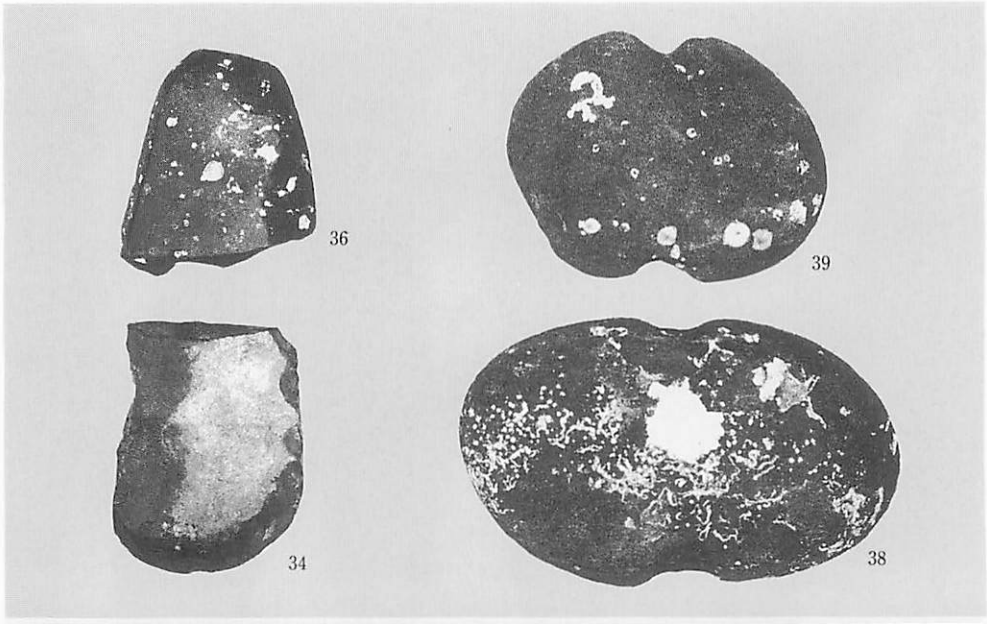
柳貝塚採集石器（1）
石鏃



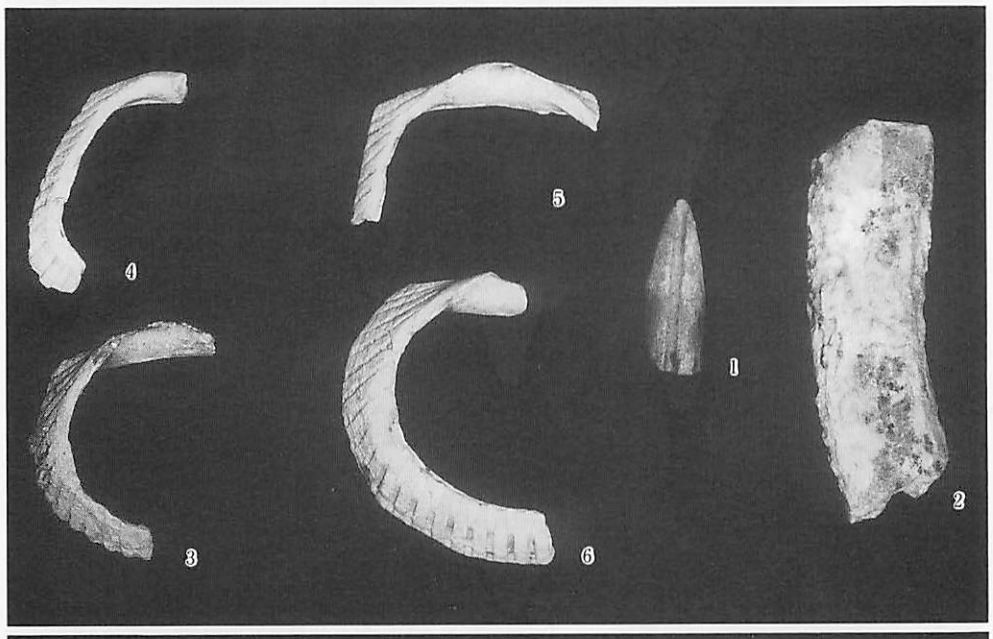
石匙



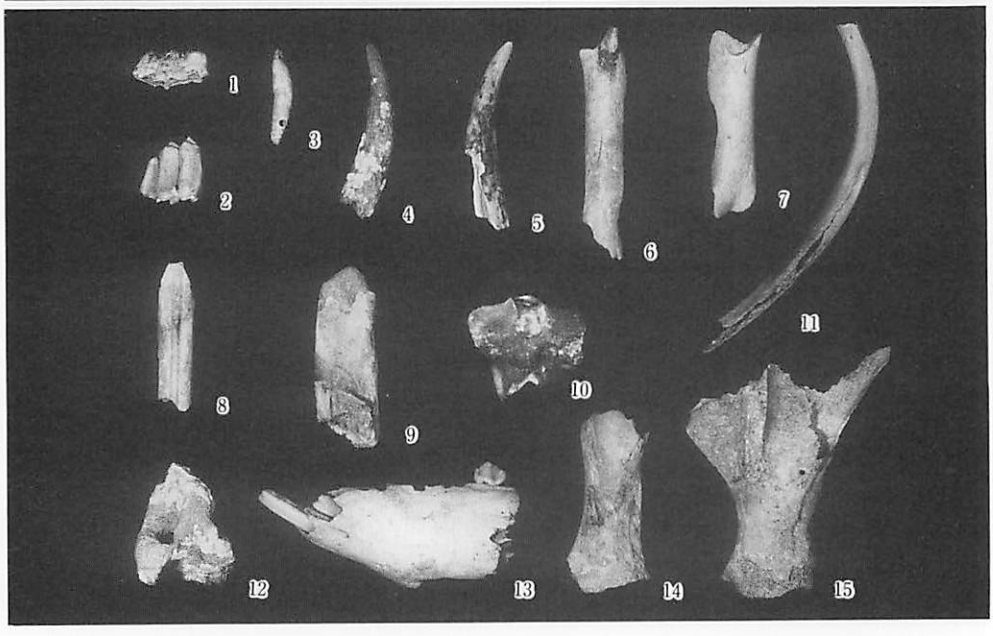
磨製石斧、打製石斧



柳貝塚採集石器（2）
磨製石斧、石錘



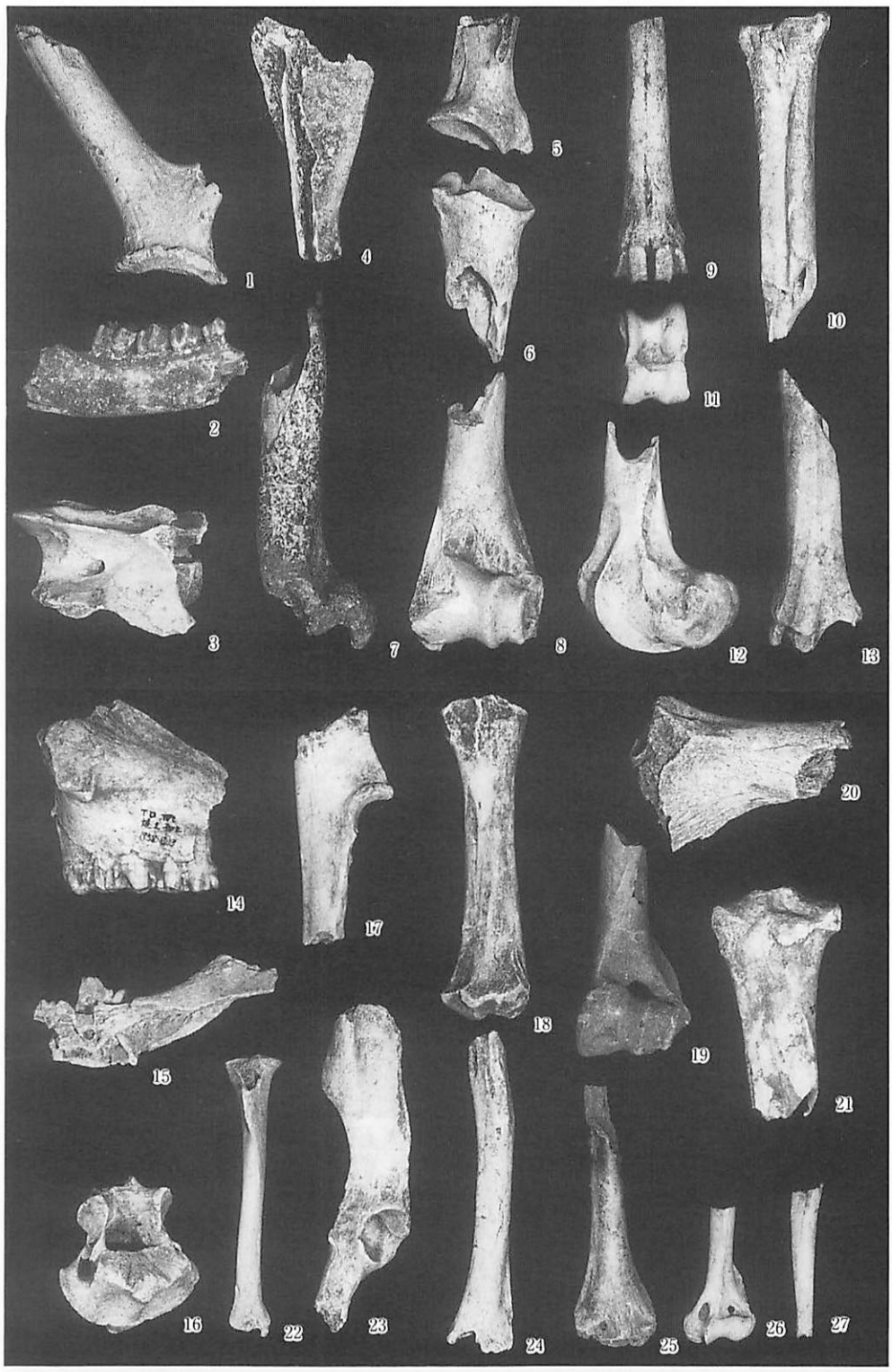
柳貝塚採集骨角器、貝製品



柳貝塚採集動物遺存体

1イノシシ歯牙
2ニホンジカ歯牙
3イルカ歯牙
4・5ニホンジカ角
6ニホンジカ脛骨？
7イノシシ上腕骨
8ニホンジカ中足骨
9イノシシ踵骨
10イノシシ脛骨
11ニホンジカ肋骨
12イノシシ上腕骨
13イノシシ下顎骨
14ニホンジカ肩甲骨
15イノシシ肩甲骨

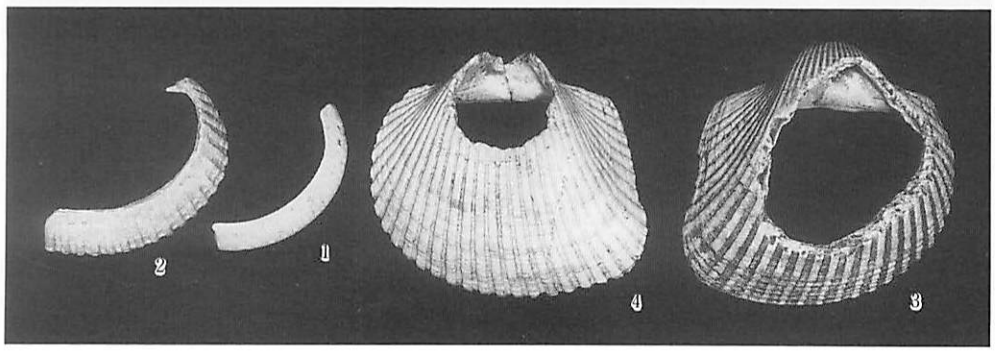
図版 5



轟貝塚出土動物遺存体

ニホンジカ（1～13）
- 1角
- 2下顎骨
- 3頸椎
- 4・5肩甲骨
- 6橈骨
- 7・8上腕骨
- 9・10中足骨
- 11距骨
- 12大腿骨
- 13脛骨

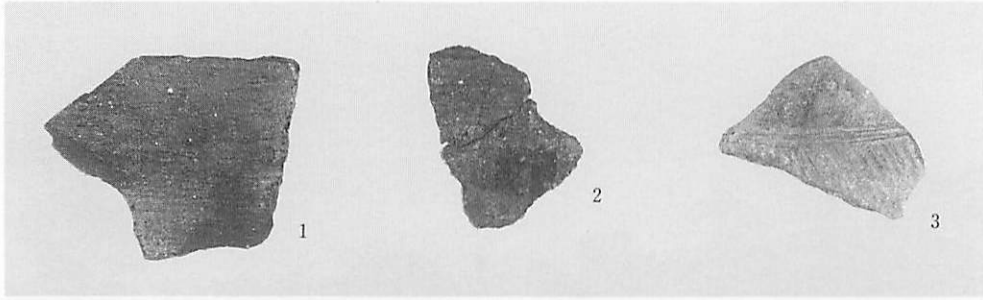
イノシシ（14～21）
- 14上顎骨
- 15下顎骨
- 16頸椎
- 17尺骨
- 18橈骨
- 19上腕骨
- 20寛骨
- 21脛骨
- 22イヌ脛骨
- 23ニホンザル寛骨
- 24ニホンザル上腕骨
- 25ツル科上腕骨
- 26アナグマ上腕骨
- 27アナグマ？脛骨



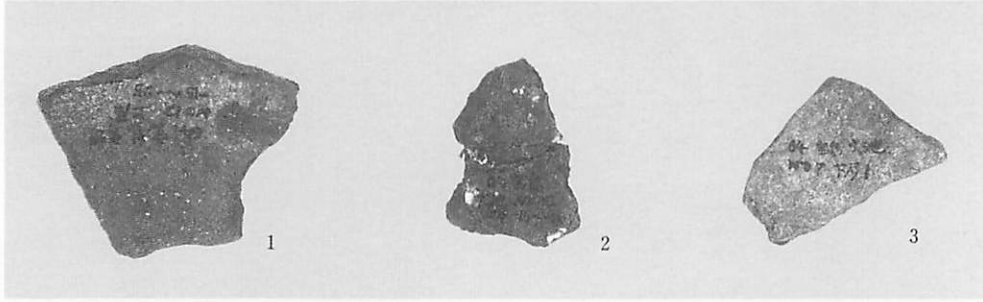
轟貝塚出土貝製品

大池遺跡出土土器

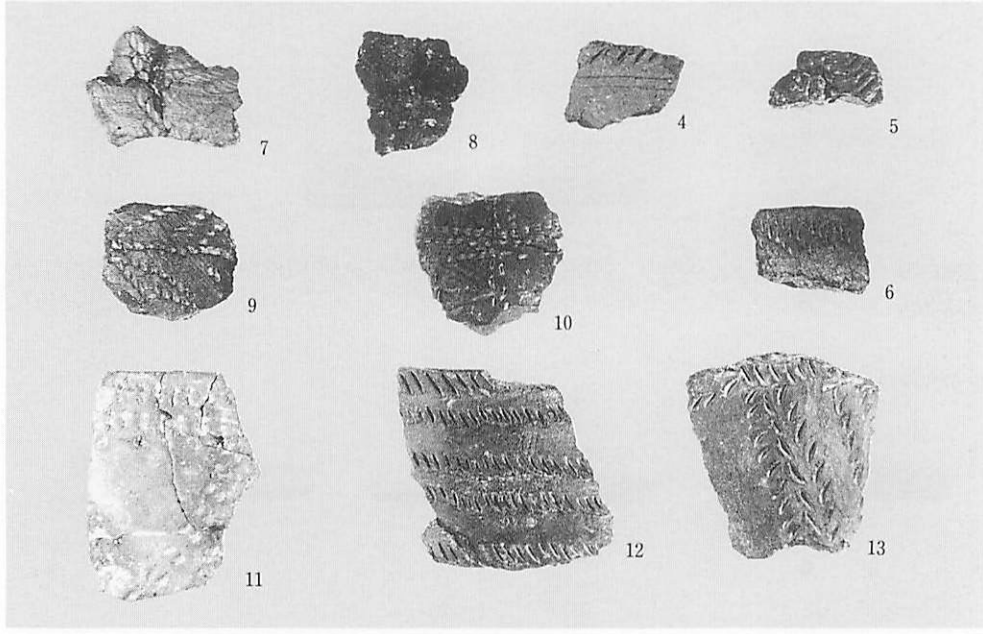
上層土器と下層土器第一類（表）



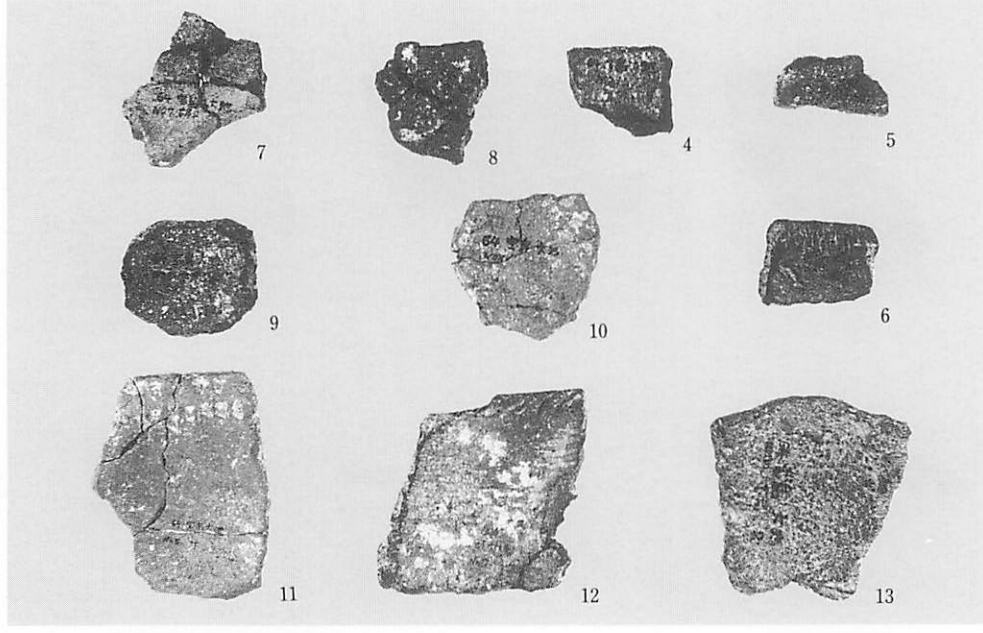
（裏）



下層土器第二類（表）

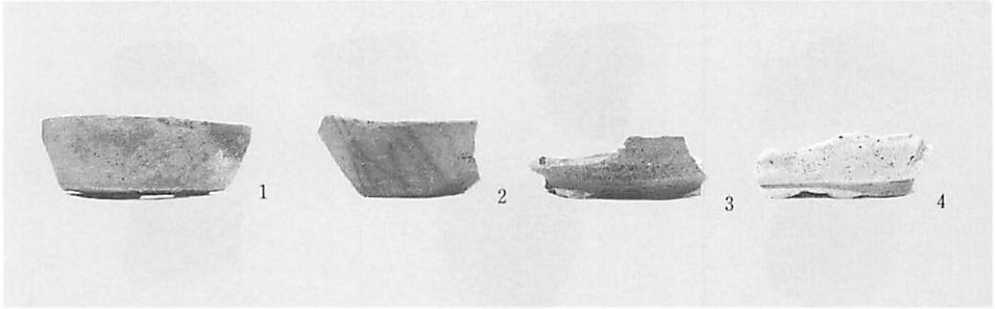
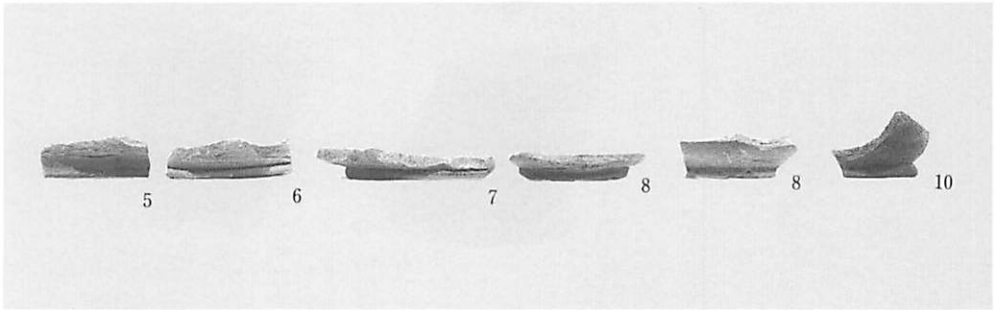
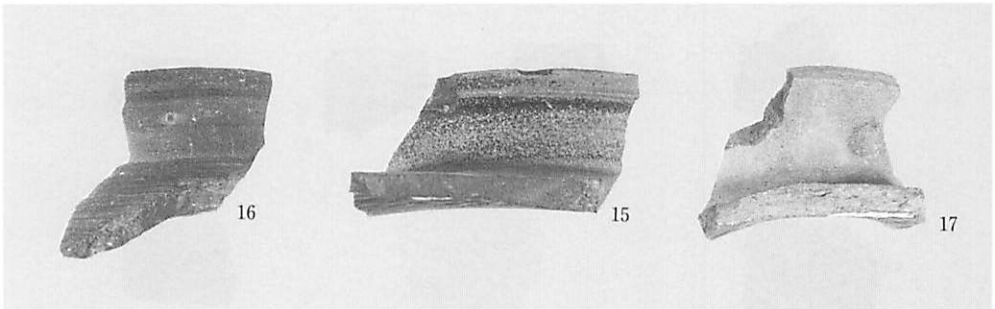
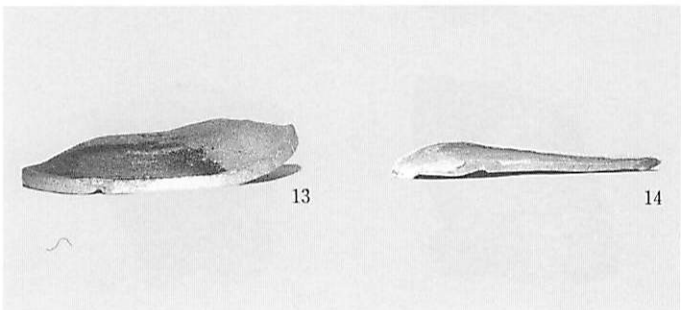
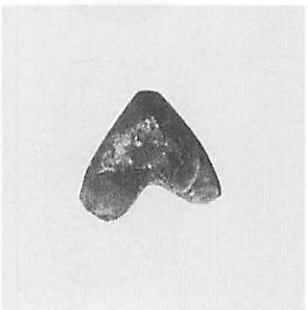


（裏）



図版 7

遺物採集地（松橋町六地蔵）
近景、採集遺物
採集地近景



採集遺物